
月に恋する

そばこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に恋する

【Nコード】

N8552B

【作者名】

そばこ

【あらすじ】

月のように儂げな幼馴染みに恋する主人公。彼女のことを守りたくて、傍にいたくて、それが難しくて：彼は心を痛める。

第1話：待ち合わせ

生まれつき色素の薄い髪と瞳。姿勢を正して歩く彼女に誰もが釘付けになる。西洋的なその容姿はどこか幻想的で、道行く男性が吸い寄せられるように近づいていく。

「ねえねえ君、一人？良かったら一緒に遊ばない？」

彼らは彼女にそう声を掛ける。いわゆるナンパだ。その光景はごく一般的で日常的なもの。

行く道を遮られた彼女はその男を見つめ……いや、睨んで、

「邪魔。失せろブ男」

可憐な彼女の口から出たぞんざいな言葉。それを聞いた男も、見ている通行人も瞬時に固まる。

その光景は、彼女の幼馴染みの俺にはごく普通のもので、相も変わらぬその性格と言葉遣いに思わず呆れた。

「あんたも邪魔なのよ。退け」

そして彼女同様にナンパされていた俺の、そのナンパしている男に睨みをきかせて追い払った。

「まったく。相変わらずモテるんだから、少しは自分で対処しなさいよ希」

彼女は、俺の方に向き直り、俺の頬をギュッとつねって説教した。

「ひててて……」

思わず涙目になる。すると彼女は手を離し、ため息を吐いた。

「……ゴメンって」

それを見て、つい俺は謝ってしまう。

「希、自分が男だからってナンパされても男と分かれれば大丈夫だろう、なんて最近では通じないのよ？ あんたぐらい可愛いとムラムラくっつきちゃう奴いっぱいいるんだから」

「……はい、気を付けます」

彼女が言う通り、そう、俺はそこらにいる女の子達より可愛いらしい。

彼女が西洋風美少女なら、俺は大和撫子的美少女……なんだそう
だ。

確かに、背も低く、黒髪に黒目という純日本風の容姿で、自分でも嫌になるほどでっかい瞳に長いマツ毛をしているから、そう言われても仕方のない事なのかもしれない。

「ん。ちゃんと反省するように」

そう彼女は言うのと、俺の頭をなでなでした。

彼女の名前は小柴姫咲。高2で俺より一つ上の幼馴染み。

同様に幼馴染みである俺の兄、社（24歳）とこの春結婚し、俺の義姉となった。

と言っても、まだ籍は入れてない。姫咲が卒業するまでは正式に結婚しないそうだ。

理由はよく知らない。

「で、今日は何？何で外で待ち合わせなのさ？同じ家に住んでるのに」

義姉となった姫咲は当然俺の実家で生活している。

なのになぜ外で待ち合わせをしたのか、また今日何をするのかを訊ねた。

「やあちゃんの誕生日、もうすぐでしょ？プレゼント選ぶの手伝ってほしいのよ。」

物心ついてずっとやあちゃんにプレゼントあげてたから、もういい加減何あげたらいいか迷っちゃって……」

「あ、そっか。しかも高校生だからお金あんま持ってないしね」

「そういうこと」

「で、待ち合わせたのは？」

「やあちゃんとお昼食べたから」

「あ、なるほど」

“やあちゃん”とは兄、社のこと。

小さい頃から姫咲はそう呼んでいて、“やしろ兄ちゃん”を簡略化したものだった気がする。

兄は現在、一般企業で働くサラリーマンをしつつ、家業である茶道の家元を継ぐため日夜修業をしている。

今日は平日だから昼休みに二人でご飯を食べたらしい。

「でもプレゼント選びなら俺じゃなくて桂でも良かったんじゃない？」

「桂はダメよ。やあちゃんのこと嫌いなもの」

「……ああ、そういやそっか」

俺が口にした桂とは姫咲の双子の姉で、姫咲同様の西洋風美少女だ。

ただし、姫咲がおしゃべりなのに対して桂は無口で、しかもなぜか社を嫌っている。

いや、“なぜか”なんて白々しいか。

桂は自分とは違うタイプの性格を持つ姫咲のことが大好きだ。

最愛の妹である姫咲。

それを8歳年上の優男に奪われてしまったのだから、仕方ないというものだろう。

「で、弟よ。やあちゃん何が欲しいとか言ってた?」

「いや、何も」

「役立たず」

「……」

役立たず呼ばわりされて黙り込む。

いや、役立たず呼ばわりされる言われはないと思うのだけど、なんとと言っても姫咲は昔から“女王気質”が抜けないやつだから、慣れっこだ。

でもこの“女王気質”が社の前では薄れてしまうのだから不思議だ。

「てか、弟よりも女房の方がそういうの詳しいもんじゃない? 俺より一緒に生活してる時間が長いんだし」

「知り尽くしちゃってるからこそ意外な盲点があるかもでしょー? ま、ないだろうけどね♪」

プレゼント選びを手伝わせると言うよりむしろ惚気を聞かせるために呼ばれたんじゃないだろうか、俺。

いいけど。いつものことだし慣れっこだし。このバカップルのことなんかどうでもいいし。

こんな調子で結局連れ回されたものの何も買わずに帰るという羽目になった。

どうせこんなことだろうと分かっちゃいたけどね。

第2話：夏期補習

翌朝。「高校」そのものは夏休みに入っているが、実際には「補習」という名の授業があつて、俺達生徒は学校に行かねばならない。

と言っても、高1、2年までは朝補習のみで、午後には帰れるのだけだ。

「ああっ！何が悲しくて花の高校生が夏休みだというのに学校に来て勉強しなければならないのだ！」

補習が始まる10分前、俺の目の前に座る友人、松永が大袈裟に嘆いてみせた。

朝だというのに暑苦しい奴だ。

「普段のように、愛らしい姫咲ちゃんが見られるのならばまだいい。しかし、しかしだ！姫咲ちゃんはなぜに補習に来ないのだあゝっ！」

……暑苦しい。

松永の言う“姫咲”とは当然俺の幼馴染みの姫咲のこと。

確かにあいつの外見は目の保養になる。我が校のマドンナ的存在だ。

もちろん、人妻ということは誰も知らない。

高校生だからいろいろと厄介だということで内緒にしているのだ。

だから学校では姫咲の名字は「小柴」でなく「大島」で通っている。

「姫咲が商業科だから補習はないって知ってるだろ」

暑苦しい松永を冷たくあしらう。

俺が通う高校には、普通科と商業科がある。

高校を卒業したら正式に我が小柴家に入る予定の姫咲は、進学しないので俺と違って商業科にいるのだ。

「何で商業科なんだあゝっ!!」

冷たくあしらったにもかかわらず、松永は暑苦しく吠える。

うるさい。暑い。姫咲は嫁になるんだから仕方ないだろ。

そう思いながらエアコンの効かない教室で松永を睨む。

松永が騒ぐ度、教室の温度が上がっている気がする。

そんなことないかもしれないけれど……

「大体、姫咲だけが美人じゃないだろ」

俺はぼそっと呟いた。

それを聞き付けた松永とは別の友人、清田が割り込んできた。

「そうそう。オレらのクラスにや大和撫子美人の希ちゃんがいるんだから、他のクラスよかラッキーだろ？」

清田は俺の肩をグツと抱いてニヤニヤ笑いながら言う。

「いや、俺が言いたいのはそうじゃなくて……」

清田という男はどうやら俺のことをとても気に入っているらしい。

だからと言ってホモというわけではなく、自分の理想の女に俺が一番近いんだとか。

……嬉しくない事実だ。

「“そうじゃなくて”？」

俺のセリフが途中で終わったことが気になってか、さっきまで暑苦しく吠えていた松永が先を促してきた。

それで清田も興味を持ったのか、俺を離して聞く体勢を整えた。

「そんな真剣に聞かれることもないけど……」

「ないけど？」

歯切れ悪く言葉を紡ぐ俺にずっと二人は寄って先を促す。

この様子だと、「美少女大好き☆」な二人のくせに、彼女が存在

をどうやら知らないようだ。

「夏の補習って、同系列の織星女子が商業科の校舎使って“補習合宿”するだろ？」

「え、そうなのか？」

キョトンと「知らなかった」と呟いたのは松永。

「そういえば、聞いた気がする」

と言ったのは清田。

この分だと本当に知らないな、コイツら。

「それがどうしたんだよ？ 織女つつたら高慢チキのがり勉女の集まりじゃねえか」

「そんな中に希や姫咲ちゃんばりの女っていねえだろ」

「なあ」と不思議そうに二人は顔を見合せ相づちを打ち合う。

「いるよ」

「は？」

「だから、姫咲ばりの美人、いるって。その織女に」

「うそだあゝ」

本当のことを言っているのに、二人はケラケラと笑って聞かない。

『織星女子高等学院』通称『織女』は、T大やK大、W大といった超難関の大学を目指す、頭がめっちゃくちゃいい女子が集まっている高校だ。

俺や姫咲が通う『天乃学園高等学校』も同系列の学校だが、その偏差値は織女の半分ほどしかない。

そういう理由もあって、二人は織女の生徒を「高慢チキでがり勉強」と言うのだが……この学校には、姫咲の双子の姉、桂が通っている。

当然、俺が言ってた「姫咲ばりの美人」とは桂のこと。

「本当だって。信じないならいいけど」

と、その時チャイムが鳴った。

気付くと補習を担当する先生が教壇に立っていた。

今日から、夏休みというのに、勉強勉強の毎日が始まる。

第3話：放課後

チャイムが鳴った。今日の補習はこれで終わりだ。

「あーっ！終わったあー!!」

人一倍嬉しそうに背伸びをしたのは松永。

「昼飯、マ○クか吉○で食ってかねえ？」

提案してきたのは清田だ。

確かに、育ち盛りの俺達は腹が減っている。

それに、俺の場合帰っても美味しい物が食べられるとは限らない。

なぜなら、花嫁修業中の姫咲のご飯が待っているに違いないから。

姫咲の料理は天才的に美味しい時もあれば天才的に不味い時もある。

そんなギャンブル的なものを食べる勇氣は今はない。

「お、いいねえ。じゃあ吉○で！」

だから清田の提案に快く乗った。

「そう言えば、今朝希が言ってたコトってホントなのか？」

「うん？何が？」

昇降口に向かう途中、松永が思い出したように訊ねてきた。

何の事を言われているのか分からず聞き返す。

「ほら、織女に姫咲ちゃんばりの美人がるって……」

「ああ」

松永の言葉で、今朝の話を思い出す。そういえば言った。話した。

「ホントだよ。姫咲と一緒にで全体的に色素薄くて……まあそれも当然だろうけど」

「なにしろ双子だし」

そう続けようとしたら、松永が叫んだ。

「ああー！ー！！」

何をそんなに驚いているのかと、松永の視線の先を見る。するとそこには

「姫咲ちゃんっ!？」

「桂」

桂がいた。

松永は姫咲と間違えて大声でその名を呼んだ。

そのせいか、桂がこちらを初めて見た。

俺と目が合う。

「希」

大声でなかったから、桂の声は聞こえなかった。

でも確かに俺の名をその口で紡ぐ様を俺は見た。

久しぶりに見かける桂の姿。

俺は少しだけ興奮した。

だけどそれは誰にも気付かれないだろうほどの興奮。

ゆっくりと、桂の方に歩み寄る。

桂も、俺の方に少しずつ近付く。

「久しぶり、桂。今日から補習合宿だろ？出かけんの？」

「ええ。お昼の買い出し組になっちゃって……希は今から帰るの？」

「うん。ちょっと寄り道してね」

桂は姫咲に比べると物静かで、無口だ。でも全然話さないってわけじゃない。

姫咲がおしゃべりすぎるんだ。

だって姫咲がない所ではいる所よりもよく話すから。

「……姫咲にバレないようにね」

俺のこれからの行動を読んだのか、桂が唐突に忠告する。

「うゝ……なんか今の一言で、姫咲に感付かれた気がする……」

「あ、ゴメン」

俺が暗い表情をすると、桂は慌てて謝ってきた。

「いや、覚悟はしてるから」

「希って、相変わらず姫咲と仲良しね」

「まあね」

久しぶりに会って、初めて桂が笑顔を見せた。

桂が微笑むと、周りの空気がやわらかくなるように感じるのは俺だけだろうか。

と、その時、後ろから物凄い勢いで抱きつかれた。

松永だ。清田もその傍にいる。

「希っ！この子誰！？姫咲ちゃんソックリ！！」

松永が興奮して顔を真っ赤にさせながら訊いてくる。

そうくると予想はしていたが、まさかここまで興奮されるとは思ってもみなかった。

清田も同じように顔が真っ赤だ。

「そりゃソツクリに決まってるよ。だって姫咲の双子の姉ちゃんだもん」

「ええっ!？」

俺の回答に二人は驚いた。

そこまで仰天しなくてもいいんじゃないか？双子なんて今時珍しくもないだろう。なんたって五つ子とかいるぐらいだから。

「名前は桂。桂、これ俺のクラスメートで松永と清田」

「初めまして、松永くん、清田くん」

「は……初めまして……っ!」

……二人とも緊張しすぎだろう。

でもまあ、気持ちには分からないでもない。

元氣いっぱいの姫咲と同じ顔で、おしとやかな雰囲気を持つ桂は、見た目とのギャップがなく、お嬢様っぽく見えるから。

ちなみに、姫咲は見た目がああでなかったら、ただのおてんば娘だ。

「私も紹介するわ。こちらクラスメートの海棠さんと神野さん。海棠さん、神野さん、彼は私の幼馴染みで小柴希くんよ」

「あ、初めまして」

「こちらこそ初めまして」

俺と桂が話をしている間に、いつの間にか近づいて来ていたらしい海棠さんと神野さんにペコリとお辞儀をする。

それを見て、二人は丁寧に頭を下げてくれた。

礼儀正しい……。

「おっ、俺も初めまして!」

「オレも!初めまして!」

桂のクラスメート、海棠さんと神野さんは、桂や姫咲とはタイプが違うが、彼女達も整った顔立ちをしていて、清楚で可憐な少女という感じだった。

だからだろう、清田と松永が慌ててあいさつした。

織星女子みたいに頭の良い女ばかり集まる所に美人なんていないと言っていた二人だ。

思っても見なかった掘り出し物に出会って、興奮しきりとみえる。

「あのっ！買い出し行くんなら俺らが荷物持ちするよ！」

「そうそう、暇だし！合宿っつーことは人数いっぱいいるっしょ？絶対重くなるからオレら持つよ」

松永と清田がアピールする。二人とも、女に飢えてるんだろうか……？

「えっ？でも悪いし……」

黒い髪を真っ直ぐ背中まで伸ばしている神野さんが戸惑ったように目をしばたかせる。

小首を傾げ、困ったように桂を見た。ショートカットの海堂さんも、目をパチパチしている。

男二人のがつつき様に驚いてんのかな……

「希」

「うん？」

桂に呼ばれ、彼女を見る。その目が「いいの？」と問うているのが分かったから、俺は言ってる。

「ああ、いいよ。ホントに暇だし。その二人、力持て余してるから使ってるよ」

「何！？使ってやってっっていう言い草は何だ希！？」

「俺なりに君らをオススメしたつもりだよ」

「ありがとう！」

俺の言葉に怒った松永が、俺のフォローに即座に礼を言って握手をしてきた。

そんな俺たちを見てか、海堂さんと神野さんがクスクスと笑っている。

どうやらウケてるらしい。

がつつかれたことを忘れたのか、さきほどまでどこかよそよそしかった雰囲気これで払拭されたようだ。

「桂」

「はい」

「そゆわけで、お供します」

にっこり笑って、桂が持っていた小さなバッグを持つ。

軽かったから財布ぐらいしか入っていないんだろう。

「希は、すっかり教育されちゃってるのね」

俺の行動に桂がくすりと笑う。

「教育された」というのはこの行動のこと。

小さい頃から姫咲に荷物持ちだのレディ・ファーストだの叩き込まれていた。

なぜなのかは知らない。

だけどそのおかげで、今みたいに自然に桂の荷物を持ったりすることができるようになった。

「まあね。お前の妹は妥協って言葉を知らないから」

肩をすくめて少しおどけてみせると、桂はまた、小さく笑った。

「ふふふ。そうね。確かに。でもそういう所が姫咲の長所だわ」

「身内のひいき目だと思うよ、それ」

「そう？」

「そう」

そんなことないよ、みたいな顔してたから断言してやる。

桂は昔っから姫咲に甘い。姫咲がどんなことをやらかしてもずっとにこにこ見守ってる。

たぶん、自分がやらないことを姫咲は当然のようにやってしまう所にひかれているんだろうと思う。

昔から思ってた。姫咲が太陽なら桂は月だと。

太陽は自ら光り輝き、それに照らされ姿を現すのが月。

それは逆を言えば、月がいなければ太陽が自ら光っていることにも気付かないということではないだろうか。

つまり、この二つは対照的であるのに互いの存在が不可欠な存在ということ。

それはそのまま、姫咲が桂にコンプレックスを抱いていることにつながってくる。

姫咲は、おとなしい桂が好きで好きで、好き過ぎて憎んでいた時期があった。

二人が小6の頃だ。

当時の姫咲は自分が輝いていることに気付いておらず、周りを見る余裕がなかったんだと思う。

だから、自分とは違う輝き方をする桂に目がいったんだろう。

しばらくして、姫咲の桂に対する憎しみは愛情に変わった。

だがその時感じたコンプレックスは消えてはいないだろう。

静かに光り、人を魅せるような桂が羨ましいと思う部分があるに違いない。

だけどそんな桂が自分に魅せられているのだと気付いてからは、そのコンプレックスすら愛しいのだと姫咲は笑う。

そんな強さに社はひかれた。

桂は、それを知らない。

だから社のが好きじゃない。

だけど社と姫咲が互いに愛してることは知っているし、認めている。

だから文句は言わない。

そんな頑固な所に俺はひかれた。

俺は、桂が好きだ。

でも誰も、そのことは知らない。

第4話：帰り道

桂達と一緒に近くのスーパーに行った。

買った物を見ると、じゃがいも、人参、玉ねぎ……なんてのが大量にあって、カレーのルーもあったから、どうやら合宿のご飯はカレーライス等の大量に作れる物がほとんどらしい。

まあ、合宿の定番だろう。それは女子ばかりでも変わらないようだ。

スーパーからの帰り道、俺は桂と並んで歩いた。そしてふと気付く。

「あれ？桂ってもしかして姫咲よりも背え低い？」

「え？……ああ、そうかも。たぶん、2、3？くらい……よく分かったね？」

桂の目線が、姫咲よりも俺に近い気がしたから、何となしに訊いてみる。

どうやら気のせいではなかったみたいで、気付いた俺を桂は目だけで不思議に思っていることを伝えてくる。

桂は表情豊かな方ではない。

だから、彼女の気持ちや考えてることが何となくだけど分かることは、俺の自慢だ。

「姫咲とはよく出かけてるから、こうやって話すの多いんだ。だから、目線がちょっと低い気がしたんだよ」

「なるほど。ホント、仲良いね」

そう笑った彼女が少し寂しげに見えた。

「桂とだって仲良いつもりだけど？」

「そうね。ありがとう」

やはり寂しげな笑顔。

何がそんなに寂しいの？俺、そこまではさすがに分かんないよ…
…。

思わず立ち止まる。

すると桂も立ち止まって俺を見た。

俺は桂を見つめた。

彼女の頑固さに俺は惚れた。

だけど……

いつまでそんな硬い殻の中にいるつもりなの？いつか、破って出てきてくれると期待するのは……間違い……？

俺は真剣に桂を見つめる。

テレパシーがあればいいと思う。

でもなくて良かった。

無駄に彼女を傷つけたくはないから。

「希……？」

「おいコラ！そこの二人！！」

松永の大声にビクツとした。俺も、桂も。

この瞬間、まるで止まっていた時間が急に動きだしたような感覚に陥って、動揺した。

視線が定まらない。

「なあゝに世界つくっちゃってんのかなあ？ん？希」

松永は海堂さんと俺達の後ろからついて来ていて、どうやら一部始終見られていたようだ。

うわあゝ……恥ず……。

「世界なんてつくってねえし」

とりあえず反論する。

「いや。ぜってえつくってた。ね！海堂さん！」

反論を否定するだけでは飽き足らず、海堂さんに同意まで求める。

おいおいおい。カンベンしてくれ……

「えっ！？えーと、うーん……」

ほら、急に振られて戸惑っているじゃないか、バカ。

だけど海堂さんはしばらくうんうん唸って、さらに恥ずかしいことを言ってくれた。

「うん。でも世界を作ってたって言うより……どっかのドラマを再現してるのかと思ったな、私」

ドラマ……

恥ずっ……！

「いや、ホント、そんなことないから！」

とにかく必死で否定する。

「必死」で辺りがより一層疑惑を深めるものだと知っていても、やっぱり必死になってしまうもんだ。

「おい。何やってんだ？」

俺達の先頭を行っていた清田が神野さんと戻ってきた。

「何もないよ。さっさ学校帰んど。ほら、松永も！」

松永が何か変なことを言いだす前にと、俺は二人をせかすように背中を押す。

その意味が分からない清田は困惑した顔のまま歩きだし、意味が分かっている松永はニヤニヤと俺を見て歩きだした。

ああ、恥ずかしい……。顔から火が出そうだ。

「希」

「うん？」

顔が火照ってないか両手を頬にあてながら、俺を呼んだ桂を見た。

「考え過ぎだからね」

「……」

一瞬、桂の言ってる意味が分からずにキョトンとなる。

だけどしばらく考えて、さきほど俺が桂を見つめた理由のことを指しているのだと分かった。

……テレパシー？

いや、桂が俺の気持ちを推し測っただけに違いない。

昔から、そうなんだ。

人のことばかり……。

「うん、分かった。桂。お前も、たまに考えすぎのところあるから、気を付けて」

「うん。ありがとう」

俺が言いたかったことを分かってくれたのかどうか、それは分からない。

だけど、今度の笑顔はただただやわらかだったから、それ以上は何も言うまいと思った。

第5話：帰宅

桂達を学校まで送って帰ると、白いエプロンに三角頭巾といった調理実習スタイルで仁王立ちした姫咲が玄関で出迎えてくれた。

「……た……ただいま……」

その迫力に逃げ出すことも思いつかず、日々の習慣で「ただいま」の挨拶をしてしまった。

「逃げろ!」と思っても時すでに遅し。

姫咲は目を鈍く光らせた。

「“ただいま”……? おかしいわね。補習は午前中までだから、私の予定ではもう希は家にいて、私の手料理をおいしく食べてるはずだけど……おかしいわね」

だったら何で、君は玄関で仁王立ちしているの……!?

てかお前の予定って何だよそれ!?

「えっと……食べて、お出かけして、戻ってきたんじゃないかなあ?」

とぼけてみせる。

いくらツツコミどころ満載のセリフでも、ツツコム余裕はない。

つつこんだら最後、……クビが飛ぶ……!!

「ああ、なるほど!でも制服のまま出かけるなんて、よっぽど急いでたのね?」

うふ☆ と笑う。

コワイッ!!目が笑ってないっ!!怖いっ!!

「……って、んなワケねえだろっ!!学校終わってどこほつつき歩いていやがった!?このストコドッコイ!!私のメシはまずくて食えないとも言うのか!?この愚弟!!」

ぷつつん。

とキレた姫咲を誰が止められよう。誰が……怖がらない?

怖いよ、怖いよ。俺は怖い!泣きそうだよっ!!お母さん!兄ちゃん!桂あっ!助けてえっ!!

なんて、泣きそうでビビりまくってる俺に構うことなく、姫咲は怒鳴り続ける。

これじゃあ“仁王”じゃなくて“般若”だ。

ていうか、“愚弟”って、俺まだ正式にお前の弟じゃないから!

「わあゝっ!ごめん!ごめんって!桂に会ったからちよっと話したりしてたんだよっ!!」

姫咲の罵声から身を守るために、頭を両腕でガードしながら言い訳をする。

嘘じゃない。

確かに、姫咲が考えているように、彼女の気紛れな料理を昼間っから口にする勇気がなくて、松永、清田らと共に吉〇に寄って帰ってくるつもりだった。

でも途中でそれが変わったんだ。

それさえ内緒にしとけば、俺が姫咲に怒鳴られる理由はしないはずだ。

いや、吉〇で食べてきたとしても、姫咲が俺を怒鳴る権限はないと思うけど……。

「……桂？」

俺の口から桂の名前が出てきたのに反応したのか、それまで般若のようなだった姫咲の顔が普段の綺麗なものに戻り、動きがピタッと止まった。

「桂に会ったの？」

確認するように聞き返してくる。

「うん」

だから頷いてみせる。

すると今度は姫咲の頬がプウッと膨らんでいく。

「……ずるいっ」

そしてスネてしまったことがよく分かるこの一言。

頬をフグのように膨らまし、恨めしそうにじとっと俺を睨む。

本当に、桂と違って感情表現豊かな奴だとつくづく思う。

「ずるいって言われても偶然だったんだから仕方ないだろ。なんだったら明日からお前も補習来れば？」

「いや」

即答かよ。

「じゃ、会えないね」

話が桂の話になったので俺は靴を脱いで家に上がる。

姫咲の怒りはどこかへ飛んで行ったようだ。

「何で会えないのよ」

姫咲がスネてる横をすり抜け、自室に向かう。

だが俺の言葉に反論するために後ろから姫咲はついてくる。

「何でって、桂は補習合宿でしばらくは学校に半缶詰状態だからだよ。それに、もともと寮に入ってるんだからなかなかこっちに帰ってこないし」

それに何より、桂は姫咲と社が一緒にいる所は見たくないだろうしね。

「何で」

説明してやっても納得いかないのか、まだつかかってくる。

お前はだだっ子か。俺よりも1コ上だろ、歳！！

「何でって何が？」

姫咲が言いたいこと、本当は分かっているけど分からないフリして訊く。

だっていろいろ、めんどくさい。

「何で桂、寮に入っちゃったの？学校違うの？」

高校入って二年目だね？桂とお前。未だにそれかよ。

正直、呆れる。

姫咲は……勝手に桂にコンプレックス抱きながら、桂は自分のこと大好きだって信じ切ってるんだから。

ホント、呆れる。

もちろん、姫咲が思っている通り、桂は姫咲のこと大好きだ。

でも……いつまでお前は桂をそうやって一人占めしておくつもり？

お前は桂のものになりはしないのに、なぜお前は桂を手放さないんだよ？

だから桂は、苦しいんじゃないか？

苦しいから、少しでも離れようと、学校お前と違うとこにして、寮に入っただんじゃないの？

……真相は知らないけどさ。

「俺が知るかよ。とりあえず、お前と頭のレベルが違ったっていうのは一つの理由なんじゃない？」

何で俺、イライラしてんだろ。

俺がイライラしているのに姫咲は気付いたらしく、後をついてくるのをやめて、立ち止まって言った。

「希、今日、何かあった？」

ゆっくりと区切って訊いてくる。

振り返ると、真剣な顔をしていた。

……何かあったと言うか、原因はたぶんお前だし。

……て言うか、その変わりっぷり、正直参っちゃうからやめてよ。
イライラも、おもしろさも、どんな感情もお前の態度が変わると
維持しにくくて、何が何だか分かんなくなるんだって。

「……別に、何もないよ。……桂は、相変わらずお前のこと大好き
だったよ」

嫌になるくらい。

「だから、生活空間離れてたっていいじゃん。お前達は双子。ちゃ
んと繋がってるよ。ずうっと見ている俺が言うんだ。信じてよ」

真っ直ぐに、羨望や嫉妬といった感情を押し殺して、姫咲の目を
見る。

数秒の沈黙。

だけどすぐに笑顔をつくって茶化してやった。

「ま、精神年齢お子ちゃまの姫咲にはちよつと難しいかなあ？」

「なっ！そんなことないし！てかあんたに言われなくたって、桂と
仲良いもん！バーカ！」

顔を真っ赤にして言い捨てると、姫咲は居間の方へと走り去って
行った。

……だから、それがお子ちゃまなんだって。

そうは思っても口にはしない。

姫咲の、ああいう所は可愛いと思う。

強がって、でも誰かに頼ろうとすることはしょっちゅうで、それでも最後は自分の意志で決める。

それだけ聞くとなんだかカッコイイけど、姫咲の場合、全て感情が丸分かりになる。

そういう所、自分でそれに気付いてない辺りはおバカで可愛い。

だけどその可愛さにひかれたことは……一度も、ないな。

そんな姫咲の傍で儂く微笑んでいた桂の方が、昔から気になっていたんだ。

自分の部屋に入ってカバンを置き、制服のままベッドに横になる。

「はぁ」

思わずため息。

「この双子は、どっちとも俺の寿命を縮めてる気がする」

机の上に飾っている、俺と姫咲と桂と社の四人が写っている写真を見て呟く。

姫咲は、俺が桂のことを好きでいるがために「嫉妬」という心の負担を掛けてくれるし、桂は「恋」という名の心臓えぐるような切なさを与える。

……寿命、縮みそうだろ？

それでも俺は桂が好きだし、姫咲のことも放つとけないんだけどね。

こればかりは、運命と思って割り切るしかない。うん。

第6話：可愛い女の子

それから数日、学校でもその外でも桂に会うことはなかった。

それは桂のクラスメートである海堂さんと神野さんも同じで、松永と清田がうるさい。

どうやら二人は彼女らのことをとっても気に入ったらしい。

それなのに、あの食料調達に付き合った時、携帯のアドレスを交換するのをすっかり忘れてしまったんだとか。

どれだけテンパってたんだって話だ。

で、もう一度会いたいから、桂と繋がりのある俺に、3対3の合コンっぽいグループで遊びに行く計画を持ちかけてきて。

それを実行させられて……

「おっす！希」

「今日もカワイイなあ〜♪希」

以前、姫咲とも待ち合わせをした所で待っていると、浮かれ気分の松永と清田がやってきて、髪をわしゃわしゃされる。

「……あー、はいはい」

いつもより浮かれている奴らの気持ちも分からないではないので、

いつもより控え目に手を払う。

女の子三人はまだ来ていない。

学校からは少し遠いから、仕方がないだろう。

今日、俺が桂に会うということは姫咲には言っていない。

なぜなら「私も会いたい!」とうるさくつきまどってくるに決まっているからだ。

でも、まあ今日は日曜日で社も会社は休み。

二人でラブラブしているだろうから、俺が文句言われることはないだろう。

……たぶん。

日曜日の街は多くの人でごったがえしている。

歩いている大半が男女のカップル。

もしかしたら姫咲と社もこの辺でデートしているかもしれない。

その可能性は高い。

ここは姫咲のテリトリー内だ。もしここで、バッタリ会ったりなんかしたら……

考えただけで恐ろしい。

人混みを眺めながら青ざめていると、後ろから肩を軽く叩かれた。

「おはよう。待たせちゃったかしら」

振り返ると、柔らかな笑顔の桂がいた。

私服だ。ヒザ丈の白いフレアスカートにミントグリーンのブラウスを着ている。

上品で、可愛い。

「桂。おはよう」

なんだか眩しくて、目を細めて笑顔で挨拶した。

そして気付く、彼女が色付きリップをつけていることに。

それは淡いピンクで、そんなに主張していなくて桂によく似合っていた。

「海堂さん、おはよう」

「神野さん、おはようございます」

桂の半歩後ろに海堂さんと神野さんの姿を見付け、松永と清田が挨拶する。

その表情は、俺と同じように眩しそうに目を細めた笑顔。

もしかしたら、結構本気で彼女らのことを好きになっているのかもしれない。

海堂さんはデニムのショートパンツに、胸元にフリルのついた白いキャミソールの上から白っぽいシャツを羽織ってるという活発な雰囲気私服を着ていた。

『活発』という言葉そのものの姫咲のファンである松永は、きっと海堂さんみたいなのが好みなんだろう。

神野さんは紺色のノースリーブワンピースという至ってシンプルな格好で、でもそのスカートの裾に和風っぽい花の刺繍が小さく入っていて、そういう所が少しオシャレっぽく見えた。

また、長い髪をキレイに結い上げていて、大人っぽい。

清田の好みは大和撫子な感じの人。

神野さんはジャストミートだと思われる。

「私服、取りに行つて遅れちゃったの」

「え？」

桂が言ってる意味が良く理解できなくて聞き返す。

「私達学校にいるから、ずっと制服なのね。私服は寮に置きっ放しだったから、一度戻ってから来たの。だから時間かっちゃって…」

今度は詳しく説明してくれた。

そうか、織女は夏休みが終わる一週間前までうちの学校に寝泊りするんだ。

私服は必要ないんだ。

「うわ。そっか、ゴメン」

思わず謝ってしまった。

だって、俺達が誘ったために彼女らにいらぬ労力を使わせてしまったのだから。

「ふふ。なぜ謝るの？そんな必要ないのに。私達だって女の子よ、オシャレしてお出掛けしたいって願望があるの。気分転換にもなるしね？だから私達、感謝してるのよ？」

クスクスと、小さく、柔らかく、上品に桂が笑う。

その笑顔は俺にはとても刺激的で、周りの音や物が消えてそこには桂しかいないような、そんな錯覚に陥る。

恋って……魔力だ。

そう実感する。

「……みっ！希！」

「えっ！？うわぁっ！！」

突然名前を呼ばれ、しかもヘッドロックをかけられそうになって驚いて大声を出した。

そんなことをして来たのは松永だ。

「おっ前、ボーッとしてんなよ。通行人の邪魔だろ」

こんな人通りの多い場所を待ち合わせに選んだのはお前だろ、松永。

という文句が頭に浮かんだけれど口には出さない。

確かに今、俺はボーッとして通行人の邪魔だったと思うから。

「悪い……」

素直に謝る。

「おう」

松永は返事をしてパッと手を放した。

どうやらヘッドロックをしようとしたのではなく、通行人とぶつかりそうだった俺を庇っての行動だったようだ。

「さてと、これからどこ行くか」

「え？」

松永のセリフに思わず聞き返す。

なぜなら奴が俺に持ち掛けてきた計画には行き先からどこでご飯を食べるかまで決められていたから。

どこに行くかなんて、迷う必要はないはずだ。

「ゲーセンとかカラオケとかじゃねえの？」

てっきり計画通り事を進めるのだろうと思っていた俺は、キョトンとなって訊ねた。

「バカッ！希っ！」

俺はただ訊ねただけなのに、松永がものすごい形相で怒鳴ってきた。

どこか真剣な感じがむしろバカっぽく見えるのは俺だけだろうか……。

「織女のお嬢様が、んな野蛮な所に行くわけないだろ！！」

今度は清田が真剣な表情で詰め寄ってくる。

あー……お前らって、ホントにバカ。浮かれ過ぎだろ。

しかも野蛮な所って、お前らが先に計画した所だから。

「……じゃあ、どこに行くのさ？」

清田に詰め寄られた分、後退って訊ねる。

たぶん、彼らは計画段階の時にまさかこんなに彼女らが可愛らしい格好で来るとは思っていなかったのだろう。

というか、相手が「女の子」というのを浮かれ過ぎて失念していたのかもしれない。

別に、彼女らにしてみればゲーセンぐらい行っても平気と思ってるかもしれないが、ここまで可愛いとその分誰かに絡まれやすくなるだろう。

そうになると、まだ高校生になって半年足らずの俺達には……少し、荷が重い。

ゲーセンに行かないという考えには賛成できる。

しかし、高一の俺達にはそんなにお金はないし、遊び場なんて決まったトコしかない。さて、どこに行く？

「どこに行くか、決めてないの？」

俺達の会話を聞いて桂が訊ねてきた。

海棠さんと神野さんも行き先が定まっていない事に少し不安を抱

いているようだ。

「ん、決まってるないっていうか、予定を変えたっていうか……桂達はどこ行きたい？何かやりたい事とかないの？」

「私は特に……海堂さんや神野さんは？」

「えっ？急にふられると……ねえ？琴実」

海堂さんが焦って神野さんを見る。神野さんの名前は琴実というらしい。響きが上品だ。

「とか言いながら私にふらないでよ、紗代。……私は別にどこでもいいけれど、前にケイちゃんが言ってたトコは？」

「え？私？」

一巡りして再び桂に回った。

紗代というのが海堂さんの名前らしい。サラリとした名前で、海堂さんに合ってる気がする。

「桂、“ケイちゃん”て呼ばれてんの？」

神野さんが桂を呼んだその名が気になって、思わず横から口を挟んでしまった。

桂は俺を振り向き、「あ」と小さく呟いて頬を赤らめた。目が逸れた所、どうやら恥ずかしいみたいだ。

「そう、ケイちゃんってクラスの皆から呼ばれてるんだよ。ケイちゃん大人っぽいから、カツラちゃんよりケイちゃんの方がしつくりきてね」

海堂さんが説明してくれる。桂の頬はまた少し赤くなった。

可愛い……

こんなふうに焦ってる桂を見るの、珍しい。いや、初めてかもしれない？

だって桂はあまり表情豊かでない。変わる時は大抵が笑顔で、社がある時は無表情か不機嫌そうにしているぐらいしかパターンは知らない。

高一になって、初めての発見だ。

「ケイちゃん……か。確かに、大人っぽい響きがあるかも」

自分でも顔が緩んだのが分かるぐらい、とても力のない表情をした。それはつまり一番自然な笑顔ということ。

そんな俺を見た桂は更に顔を赤くする。

うわぁ……カワイイ。

「で、ケイちゃんの言ってたトコって？」

ちよっと意地悪して、わざとニコニコと桂に訊ねる。

それが分かって桂が小さく怒った。

「希っ。性格が悪いわよっ」

大声で怒鳴らない所が姫咲と違う所か。いや、姫咲のように般若にはなっていないから全然違うかな。

「日頃傍にいる子の影響だよ」

舌を出して反論する。

俺の反論は桂にはとても納得いくものだったようで、言葉が詰まり、小さく睨まれただけだった。

それがまた可愛くて、小さく息を洩らして笑う。

女の子の成長は男に比べて早いと聞く。それは姫咲や桂、そして俺にも当て嵌まる事だった。

高一になってもう半年経とうかとしているにも関わらず、俺の身長は158cmと小さい。

それに比べ、姫咲は167cm、桂は165cmと俺よりも高い視線をキープしている。

このように、物理的な面の成長も彼女らが早かったわけで、それと同時に精神面も彼女らの方が早熟だった。

でも、あとは俺が彼女らに追い付き、追い越す番。だから、今日

の桂をやたらと可愛く思うのだろう。

いつか、背も彼女らを越すだろうか……

「あは。ごめんって。で、どこ？」

謝ってもう一度訊く。

桂は一時俺を睨んでいたが、小さく息を吐いていつもの調子を取り戻した。

いつも通り、整って綺麗な桂。

「別に、大したトコじゃないのよ。ただ……姫咲が楽しかったって言ってたから、ちょっと興味を持っただけ」

そう言った桂の表情は笑顔のような、でも眉間に皺を寄せて不機嫌そうな、文字通り複雑な表情。

きっと、その心の中も複雑な感情が渦巻いているのだろう。

第7話：男の子と女の子

桂の話して思い出した。最近、姫咲と社がデートした事を。

確か行き先は今年リニューアルオープンしたばかりのとあるテーマパーク。

その日帰ってきた姫咲は「楽しかった」と満足気な感想を洩らし、「桂に写メ送った」とも言っていた。

たぶん……いや、間違いなく、桂はそのテーマパークの事を言っているのだと思う。だから、複雑なんだ。

姫咲と社の関係は、桂の心をすり減らす。

なぜ彼らと桂は幼馴染みなのか、姉妹なのか。

もし違っていたら、桂はどんなに伸び伸び朗らかに生活できた事だろう。

でもそれは、俺とも幼馴染みではないという事。

それは嫌だ。

……自分勝手だ……

と思う。

「それって、TOYOSHIMAランドの事？」

絶対ここだと、分かっているけど一応訊ねる。

「TOYOSHIMAランド」。

リニューアルされる前は「とよしまランド」だった。

「とよしま」をローマ字にするなら、「ランド」もアルファベツトに変えりゃよかったのと思うのは俺だけ？

「うん。よく分かったね？」

「姫咲様のお口は軽やかだから」

わざと丁寧に言う。

嫌味だ。

それが分かっている、桂は笑う。

声を出さず、小さく息を洩らして楽しそうに。

「ふふ。“軽やか”ね。いい表現だわ」

「適切だろう？」

「ええ、とても」

そしてまた笑う。

今日はよく笑うね、桂。

何か良い事でもあったのだろうか。

「へえ。TOYOSHIMAね。オレ、タダ券手に入るよ」

俺と桂の会話を聞いていた清田が言った。

「え？」

清田の言ってる意味が分からず、全員が清田を振り返る。

「タダ券が手に入る？」……？それは、どういう事？

全員が同じ気持ちで清田を見る。

俺達が言いたい事を察したのか、清田が「ああ」と小さく声を洩らし、続けた。

「オレの親父、TOYOSHIMAの社長と友達なんだよね」

「うおっ！マジで！？」

「マジで」

松永の正直で大袈裟な反応に気を良くしたのか、清田がニヤリと笑う。

清田は眼鏡をかけている。銀縁で、インテリに見える。実際にはただのバカ。

その眼鏡が光に反射してキラリと光った。

「しかも家族ぐるみの付き合いでさ、美人連れなら大歓迎でタダでアトラクション乗り放題にしてやるって会うたんびに言われててさ、調度いいと思わねえ？」

「確かに、ナイスタイミングだな。なんと言っても美人が4人も揃ってる」

松永も清田の雰囲気に乗ってニヤリと笑う。

確かに、「美人連れ」っていうのは引っ掛かる所だけど、松永が言うように今日は美人が揃っている。

しかも女3人中3人ともが可愛い。

……ちょっと待て？今松永は「美人4人」って言っていなかったか……？

「松永、美人は“4人”じゃなくて“3人”だろ？」

不思議に思って訊ねる。

すると質問相手の松永ではなく、清田がさも当然のことと言わんばかりの口振りで答えた。

「いや、4人だ。桂さん、海堂さん、神野さん、希。ほらな？4人」

「はあっ!？」

思わず素っ頓狂な声を出した。

今、こいつ、何て言った？

「ちなみに希が一番可愛い」

そう言って清田が俺をガバツと抱き締める。

思いもしなかった事態に、俺は清田を突き飛ばす事さえ忘れて頬を赤くしてしまった。

「ば……っ！ お前何言ってるの！？ バカ！？ 俺のどこが可愛い……っ！ かいい加減放しやがれバカヤロー！！」

焦って、しかしここが街中であることを思い出して奴の足を踵で踏んづけて突き放した。

そのまま倒れりゃ良かったのに、松永がフォローに入って飛ばされた清田をしっかりとキャッチ。

フォロー入んなよ！！

「っ！ かお前、こんな可愛い女の子達目の前にしてよくそんな事言えるな！ 恥を知れ！ っ！ か俺は男だ！ この子達の方が可愛いだろうが！！」

一気に怒鳴る。

さっきまで男に抱きつかれていた男だ。

もう街中の視線なんて気になんないね！

「確かに、お前の言う通り彼女達はとてもキレイだし可愛い」

清田が真面目顔で率直に言う。

その真面目な顔に腹が立つのは俺だけか！？

小馬鹿にされてる気がするのは俺の思い過ごしなのか！？

どうなんだ清田！！

もっとたくさん怒鳴りたい所を抑えに抑えて清田の言葉を待つ。

「が、しかし」

清田は「しかし」を協調した。

「男なのに可愛いと思えるお前が一番可愛いってコトだろ。違うか」

どっかの教師のように真面目で、そして低めの声音で話す。

……本気で言ってるんだからイヤになる。

「そんなもんヘリクツだろ」

「そうだ」

キラリと眼鏡を輝かす。

「認めんなよ、バカ」

何だかどっと疲れた。

そんな俺達のバカバカしいやり取りを見ていた桂達はクスクスと楽しそうに笑っている。

彼女達にはこのやり取りがコントにでも見えていたようだ。

……やんなる。

「ふふふ。でも、確かに希は可愛いわよねえ」

桂がやわらかく微笑む。

彼女にそんなふうに微笑まれたら俺は何も言えない。

「あ、桂さんもそう思う？」

「ええ」

「希は俺らのクラスのアイドルだからね」

松永がぐりぐりと俺の頭を撫でる。

その手を払うのも面倒で、睨んで抗議する。

……伝わらず。

「希くんは女の子から見ても可愛いよね。私もそんなが良かったな」
海堂さんがちょっと羨ましそうに俺を見る。

彼女の背は俺と余り変わらないらしく、いや、俺より少し小さいかもしれない。

俺から見ればみんな可愛いのに……何でそんな目で見るかな。

思わず溜め息を吐きそうになって、慌てて飲み込んだ。

「俺は、女の子ってだけでみんな可愛いと思うけど？
その中でも確かに顔がキレイな子はもちろんいるんだけど、
そうじゃなくて女の子はみんなどこかしら……弱い面があるでしょ？

いや、男にもあるんだけど。

でも女の子の場合そういう弱い面をそのまま見せてたり、
隠そうと努力したり、強くなろうとしたり……見ないフリしたりしてて、

そこが痛そうで庇ってあげたくなる。

そんな可愛さがあると思うんだけど？

男はたぶん、本気で惚れた人にはそういうの感じてるんだと思う。
それに気付いている男もいれば、知らない内にひかれてて、
でもその方では認識して守ろうとしてるんだと思う。

それは、兄・社の事でもあり、俺自身の事でもある。

社は強くあろうとする姫咲の痛みに反応した。

俺は弱さを無視する桂の痛みに反応した。

痛々しいほどの、彼女らの心は頑なで、モロい。

崩れた時、支えられる男に俺はなりたい。

たえ望まれないとしても。

話をしているうちに真剣になってしまっている俺を、みんなが真面目な顔して見ている。

そこでやっと我に返った。

何を語っているんだか……恥ずかしい……

「……なうんて、そんなかたっ苦しく考えんなって話だよな」

ハハハ。とわざと大きな声で笑って頭を掻く。

照れ隠しだ。できればこれで、聞き流して欲しい。

つつこまないでくれよ。

「希って、たまに男らしい事言うよな」

ポツリと松永が言う。

「正直、惚れるなあ」

つられて清田もポツリ。

いや、だからつつこむなって……！

「希は小さい頃からそんなよね」

「え？」

桂の言葉に俺は思わず聞き返してしまった。

だって、「小さい頃から」って、俺、そんなマセガキじゃなかったと思うから。

どちらかと言えば、大人びていたのは桂と姫咲の方だ。

それについていくのが俺はやっとだった記憶がある。なのに、桂はそんな事を言う。

なぜ？

そう思うのは当然だろう。

「希は……私達よりいくらか大人びていたわ」

「へえ、そうなんだ」

「そんな感じは確かにあるよね」

なんて。俺の疑問や戸惑いを余所に、桂達は話を進めている。

「大人びてた」？

ウソだ。俺は幼かったよ。

「私達より」？

君らの方が、大人だったじゃないか。

分からない。なぜ、桂がそんな事を言うのか。

「……まあ、いいじゃん、そんなの。それで清田、タダ券は？」

なんだか桂の話をこれ以上聞きたくなくて、話を元に戻す。

「あ、そうだった。連絡してみるわ」

清田は思い出して携帯を取り出した。

結局、待ち合わせ場所で約10分ほど立ち話をしてTOYOSH
IMARランドへ移動となった。

10分……無駄な時間を過ごしたような、重要な時を過ごしたような、よく分からない。

第8話：遊園地

TOYOSHIMAランドは夏休みという事もあったか親子連れが多く、今日だけを見る限りではそれなりに繁盛しているようだ。

全国に知れ渡っている有名なテーマパークに比べると、アトラクションの迫力は微々たるものだが、子供から大人まで遊べるという点はウリになるのだろう。

「うわあゝ。やっぱり人多いなあゝ」

感嘆の声を洩らしたのは松永。

ここに来る間、一番ウキウキした様子だったがさすがにこの人の多さには辟易したようだ。

高校生とは言えやはり子供。こういう所に来る時はどうしても胸が躍る。

しかし、子供と言っても高校生。大人に近い分、子供より少しばかり冷めた部分もあるものだ。

こう人が多いと「ウザい」という気持ちが浮上してしまうというものだろう。

それは子供っぽい松永も同じらしい。

「そうか。今日って夏休みの上に日曜なんだよ。人も多いはずだ」

今その事を思い出したらしい清田が「しまったなあ」と顔を歪める。

もしかすると彼は空いている状況を想像していたのかもしれない。

たぶん、人が少ない方が貸し切りみたいで、しかもタダで乗り放題だから気分がいいと思っていたのだろう。

俺も、似たような事を考えてた。

「とりあえず、何かに乗ろうぜ？そろそろ飯の時間だろうし、その間少しは空くだろ」

現在午後11時半。

俺はそう分析して提案した。

もしかしたら、同じ事を考えている一行もいるかもしれないが、少なくとも朝から来ている人々は昼食をとるだろう。

それだけでも動きやすくなるんじゃないだろうか。

「そうだなあ。じゃあ……」

清田がチラッと女の子達を見る。

そしてチラッと……人がたくさん並んでいる一番人気のアトラクションに目をやった。

足場がないジェットコースター。

清田はどうやら絶叫系が好きらしい。

乗りたくてウズウズしているのか、よく見ると頬が紅潮している。

暑さのせいという事はないだろう。

いや、好きなのはいいけどさ、俺も好きだし乗りたいけどさ、すぐに乗れそうなのから行こうよ。

まあ、絶叫系が苦手かもしれない女の子達に気を遣う所は買うけどさ。

女の子達はそんな清田の気持ちがあったのか、互いに顔を見合わせて、3人のうち神野さんが代表して言った。

「私達みんな絶叫系苦手じゃないから、とりあえずすぐに乗れるのから乗りましょう？ 乗り放題なら、できるだけたくさんのアトラクションを体験したいなと私達は思うのだけど……」

清田の気遣いに対し、的外れではないしっかりとした自分達の意見。

さすが、織女！

神野さんに言われ、清田は名残惜しそうにジェットコースターに目をやり、誰が見ても分かるほどガックリとした表情で頷いた。

清田もやっぱり“男の子”か。彼女たちの方がとても大人だ。

「じゃ、とりあえずあそこ入んねえ？」

今まで静かにしていた松永が、急に喜々とした声でそう提案した。

彼の指先を辿ると……そこにはお化け屋敷。

お化け屋敷が好きなのか、はたまたお化け屋敷で「キャー」と叫んで女の子がしがみついてくるのを期待しているのか。

ま、女の子と遊園地って言ったら定番と言えば定番。

でも、一番最初がそれって、むしろテンション下がらないか？

「あそこって、お化け屋敷？」

「そう」

海堂さんの質問に、やはり喜々とした表情で頷く。

……やはりただお化け屋敷が好きただけだろうか。

「確かに空いてるけど……」

海堂さんは少し不安そうに神野さんと桂を見やる。

その表情から推測されるのは、海堂さんがお化け系苦手かもしれないという事。

そうだとしたら、無理強いはしたくない。

松永はそんな海堂さんに気付いているだろうか？

「ちょっと……私、パスしたいな……」

申し訳なさそうに松永に言う。

「海堂さん、お化け屋敷は苦手？」

「うん……ごめんね」

松永の質問に、海堂さんは本当に申し訳なさそうに目を伏せて答えた。

本当に苦手なのだろう。

「じゃあ……やめようか、入んの」

さすがの松永も彼女の事を思って先程の提案を取り下げた。

すると海堂さんは慌てて顔を上げた。

「えっ！？ そんな、私だけの為に入るのやめるなんて……ダメだよ。だって松永くんすっごく入りたそうだったのに……」

「いや、入りたいのは本当だけど、海堂さんが一緒じゃないならつまんないし、入んない」

「え……」

松永の言葉に海堂さんの頬が赤くなる。

松永を見ていた丸い目が視線を逸らして下を向いた。

そんな海堂さんを松永はジッと見ている。

……ラブシーン？2人の世界ってこういう事か！？

てか松永！お前ケロッと凄い口説き文句を言ったんじゃないか！？

お前って実はタラシ！？タラシなのか！？

今まで……と言っても友達になってまだ半年も経たないけれど、見た事のない松永の男っぷりに俺はパニックに陥った。

そんな俺に気付いてか、松永とは中学からの付き合いらしい清田が耳打ちしてきた。

「アレ、計算じゃなくて天然。中学ん時からあの調子で、好きになった子は絶対逃さなかったんだぜ」

天然！！

うゝわあゝ、女殺しだあ。男の敵だあ、コンニャロウ！！

「マジ？」

「マジ」

清田の目も声も真剣だったから、本当の本当に……天然なんだ。

ビククリゝ。奴にそんな特技があったとは！

なんて、俺達がコソコソと会話をしている内に海棠さんは松永の天然タラシにやられたらしく、いつの間にやらお化け屋敷に向かっていた。

……マジ？

「あの子が自分からお化け屋敷入るなんて信じられない」

ポソッと呟いたのは神野さん。

海棠さんの事を名前で呼んでる所と言い、この口振りと言い、どうやら2人はそれなりに長い付き合いのようだ。

「そんなに驚く事なんだ？」

清田が訊ねる。

「ええ。小さい頃からそういうの、見えるらしくて……」

「えっ!？」

神野さんの言葉に俺と清田が一斉に驚きの声を上げる。

「うん、靈感あるらしいの、あの子。

それで小さい頃から金縛りにあったり、ちょっとした霊にイタズラされたり取り憑かれたりしてたらしく、わざわざ霊のいそうなどこ行こうとしないの。

なのに今日は……」

お化け屋敷のような所には本当に霊が来たりすると聞く。

彼女はきっと、それを心配しているのだろう。

「ああ、だったら大丈夫」

「え？」

清田が何を思ったか自信満々の声でそう断言した。

一体何が大丈夫？

「あれ、希には言ってなかったっけ？ あいつも靈感あるんだよ」

「……え！？」

初耳だ。思わず目を丸くする。

「しかもめっちゃ強いらしくてさ、
おもしろがって除霊とかの勉強したら成功しまくりで
お寺さんが依頼してくるぐらいスゲーんだよ」

……初耳だ。

「だから、大丈夫」

“大丈夫”の意味が分かった。

あと、松永が喜々としていた理由。

絶対アイツ、霊見たさと除霊したさだ。

ああ、なんて奴だ。

俺の友達って、ホント個性的で……

疲れる。

「おーい。お前ら入らねえの？」

後ろからついて来ない俺達に気付き、松永が声を張る。

「あ。今行く！行こう、神野さん」

「え、ええ」

清田がさりげなく神野さんを誘って松永の傍に駆け寄る。

「希、行かないの？」

松永の声に返事もできず、清田が走って行ったのをぼーっと見送った俺を不審に思ってたか、桂が顔を覗き込むように近づけてきた。

うわっ……！

思わず顔を引く。

一気に身体が熱くなった。

もしかしたら、気温よりも体温の方が高いかもしれない。

「希？」

俺の態度に桂が眉根を寄せる。

「どうしたの？」と、その目が訴えてくる。

「いや……その……」

しどろもどろ。

情けなくて涙が出そう。

……なんて、大袈裟だけど。

「なんか疲れたから、ベンチ座って待っとくよ」

「疲れた」なんて、大した事していないのに。

でも精神的に疲れたのは本当の事。

それに、今日の主役はあの男2人。俺は出しゃばりたくない。

お化け屋敷の前で、4人は俺と桂を待っている。

早く桂を向こうに行かせるべきだろう。

「桂は行っておいでよ。せっかくだし」

笑ってそう勧めると、桂は一瞬、眉間の皺を一層強く寄せ、しか

しすぐに普段の表情に戻って、

「分かった」

と一言呟くように言って、4人の基へと歩き出した。

第9話：双子の再会

その背中を少し眺めてから、俺は近くのベンチに腰をおろす。

桂のさっきの表情。あれは……

「怒った……？」

かな？

思わず苦笑した。

小さな溜め息を一つ吐く。

美人が怒ると怖いと言うけど……その通りだ。

特に桂と姫咲、この双子の怒りっぷりは怖い。

姫咲は炎の如き怒りっぷりで、桂は氷の如き怒りっぷりと対照的ではあるが、どちらも怖い事に変わりはない。

あの、さっきの眉間の皺の寄りっぷりは……怒らせたかどうか判断が付かない程度だったが、それに近い感情が彼女の中に生まれていたのは確かだろう。

「……怖いな……」

ボソツと呟く。

その時、目の前に一つの陰が落ちた。

見上げると……

「怖いと思うなら何であんな事言うの？」

「桂……！」

桂が立っていた。

彼女の顔は無表情で……いや、少し眉間に皺が寄っているか……？

ちょっと、怖い。

「“疲れた”なんて……」

目が鋭く俺を見下ろす。

「……」

何も言えず、ただ桂を見上げていると、彼女は小さく息を吐いて隣に座った。

瞬間、フワッと何か甘い香りが俺の鼻孔をくすぐる。

香水でもつけてきたのだろうか？

香りの甘さにドキドキする。

不謹慎な俺。

「希がいないと、私は一人あぶれちゃうじゃない」

「あ……」

桂の言葉に「そうか」と理解した。

「しまった」と思っているとそれが顔に出たのか、桂が小さく笑った。

「まあ、一人でも良かったんだけど……希が何か、辛いのかと思って」

「え？」

「違った？」

「辛い」と思ったわけじゃない。

別に、何ともない。

ただテンションが低いに過ぎないと、自分では思う。

ただ、それだけだ。

けど……桂に心配を掛けてしまったらしい。

そんな自分も情けないし、腹立つんだけど、でもそれ以上に……
なあ、桂。

それはやめたがいいよ。

「違うよ。……桂」

「なに？」

桂が微笑む。

痛い……

「人の事ばっか推し量ってちゃ、楽しい事が分かんなくなるよ？」

「え……？」

桂の顔が固まった。

「今日のは俺の責任。ゴメン。でも桂、君はいつもそうだ」

いつもそうだ。

人の事ばかり。

自分は？自分の事はどうするの？どうしたの？どこにいつも隠してるの？

ううん、違う。

どこに……仕舞い込んでしまった？

「……」

桂は黙り、俺から目を、顔を逸らした。

「桂は優しいね。人の気持ちを分かろうと努力するし、人の痛みも感じられる、そんな人が桂だ。……優しい、優しいよ。でも……」

「俺は……」続けようとした時、テンションの高い声に遮られた。

「桂っ！」

「！姫咲っ！？」

その声の主に一瞬驚き、でもすぐ嬉しそうな表情に変わる桂。

そう、テンションの高い声とは姫咲の桂を呼ぶ声の事。

この双子はゴールデンウィーク以降会っていないから、約3ヶ月ぶりの再会。

テンションも……そりゃあ、上がるだろう。

「いやあ〜ん！久しぶり〜♪」

ぎゅうっと桂に抱き付く。

姫咲も桂もこれ以上ないくらいの笑顔だ。

その桂の笑顔が、ホッとしたように緩んだのを俺は見逃さなかった。

追いつめた……だろうか。

まだ、深くつつこむのは早いだろうか？

もう、子供と言うには育ち過ぎた精神年齢。

一部、ひた隠しにしている所を除き、桂の大人度は高いだろう。

でも、その一部の成長がなされないままでは……

彼女は、ガラスのように脆い。

「相変わらず桂美人〜。カワイー♪」

美人って……カワイーって……お前、同じ顔だから。

「姫咲も変わらず、元気でカワイーわね」

照れたように笑って、桂も姫咲をぎゅっとする。

あーもー、バカップルめ。

「はい、そこまで。公衆の面前であんまりイチャつかないように。ハタから見たらナルシストだぞ〜」

「兄ちゃん」

「やあちゃん！」

「……」

姫咲は俺と桂が座るベンチから少し離れた所から駆けてきていたらしい。

双子の再会が一通り終わって、姫咲の夫、つまり俺の兄である社が登場した。

慎重179cm、細身で黒髪 of イケメン……ちょっとタレ目……な男、社。

学生時代からモテモテのこの男は、今でも歩けば女の子が寄ってくる。

今年で25歳、姫咲との恋人暦3年目（あ、結婚したら恋人じゃないのか……？）、姫咲に惚れてからは……5年目。

本人はロリコンじゃないと言ってるけど、当時は姫咲12歳で、社20歳。

誰だってロリコンと思うんじゃないだろうか。

社の登場に、姫咲は一層笑顔になり、反対に桂は眉間に皺を寄せて渋面になった。

姫咲の登場から予測はしていたのだろうが、実際目の前に現れると嫌らしい。

それが顔にしっかり表れているのだから、社に対しては素直と言う事ができるかもしれない。

……まあ、“素直”と言うより、“ワザと”そうしているのに過ぎないのだろうが。

「ナルシストだなんて、ヒドイ」

姫咲がぷうつと頬を膨らます。

「顔、一緒じゃないもん」となんとも子供っぽい言い方で文句を言いつつ、桂から離れて社の右腕に自分の腕を絡める。

……バカ。

桂の表情は変わらない。

しかし、小さく眉を顰めたのを俺は見逃さなかった。

彼女は小さく、だが大いに傷付いた。

何で、最近デーとしたばかりのTOYOSHIMAに2人はまた来たのか。

タイミングの悪さに心の中で舌打ちする。

今朝の桂はご機嫌だったというのに、今はただ暗く沈む。

タイミングが悪い……

「桂、久しぶりだなあ」

桂が社の登場で不機嫌になっている事を知ってか知らずか……いや、絶対に気付いているだろうに、嫌がらせをしたいのか、社が桂の頭を撫でようとご機嫌で腕を伸ばす。

しかし桂は、社の腕が届かない所まで上体を反らし、一睨みした。腕を払う為だけでも、社の身体に触れたくはないらしい。

「そうね」

一言、冷たく言って、社から目を逸らす。

……目も合わせたくないらしい。

桂の眉間の皺が深い。

「たまには、帰っておいで？」

優しく、社は言う。

「実家にね。あんたがいない時ね」

社に対する桂の口調は、本当に桂が言ってるのかと疑わしく思うほど、冷たく刺々しい。

表情はそれ以上に強張り、硬く静かな怒りのオーラを漂わす。

そんな桂が、見ていて辛い。

社は桂のその頑なに自分を拒む様に苦笑し、これ以上話すのは無

理と悟ったのか、今度は俺に話を振った。

「で、今日は2人でデートか？」

「違うよ。他に4人、俺と桂の友達がいる。6人で遊びに来たんだ」

社の質問で、姫咲が俺の事を睨んだから、少しビビりながら答える。

デートじゃない。遊びに来た、それだけだ。ま、男2人の気分はデートだろうけど。

もちろん、その2人とは松永と清田の事。俺は……そんな軽やかな気分にはなれない。

「そういう2人はまたここでデート？バリエーションないね」

桂が不機嫌になった事が辛くて、嫌で、知らずきつい口調になる。

それに社はただ笑ったけれど、姫咲はそうはいかなかった。

「ちょっと希。その言い方は何？お姉さんそんな子に育てた覚えはないわよっ！」

社がいるから少し控え目に、だけでもの凄く怒っている事が分かる形相と口調で俺の頬をギュツとつねる。

「ひひゃいひひゃいっ！」

涙目で「痛い」と訴えると、一瞬強くギュウツとつねってパツと

放した。

「ひいっ……たぁ〜いい……」

思わず涙声。

なんて乱暴な奴なんだっ！姫咲！

そう思って姫咲を睨みそうになり、慌てて顔を伏せる。

勢いに任せて彼女を睨んだりしたら……

更に恐ろしい目に遭うだけだ。

それはさすがに避けたい。

だから慌てた。

そんな俺の心理が伝わったのか、姫咲はニヤリと笑った。

「よく分かってるじゃない」とその雄弁な瞳が言っている。

恐ろしい女だ……。

ていうか、俺お前に育てられた覚えないんだけど……

そうは思っても心の中に仕舞い込む。

言っちゃったりしたら……あーもー、……恐ろしい。

「バリエーションがないんじゃないの。もうこの辺のデートスポットは行き尽くしちゃったのよ。だから、気分でここなの。分かった

「？」

にいつこりと笑って俺を見下ろす。

女王様め。

なんて、意味不明な文句しか浮かばない俺って、バカかしんな
い……。

「そーですか。それはスミマセン」

「分かればよろしい」

俺が素直に謝ると、姫咲がご機嫌で俺の頭をなでなでした。

桂がその光景を「仲良しね」ってお姉さんみたいな……実際お姉
さんだけど、そんな顔で微笑ましげに見ている。

1歳しか違わないのに、何で俺はこうも子供扱いされるんだろう？
情けない。

「で、何で今日桂と遊ぶ事、教えなかったのかな？」

顔はにこやかに。

でも声は冷ややかに目は鋭く俺を突き刺す。

やっぱ……それがお怒りの原因ですか……？

冷や汗を掻くを感じながら、俺は笑顔を作る。

怯んだら……つけこまれるぜ、気を付けろ！

「今さっき、決まったから☆」

嘘八百。

実は数日前から決まってた♪

なんて本当の事言ったら石にされかねない。

「へえ。すご。よく予定合ったねえ。偶然なんだあ。」
ふうん」

姫咲の笑顔が怖い……

嘘ってバレバレ。

そりゃそうだ。

「数日前からウキウキしてたみたいだけど、今日の事、予感してたのかなあ？すごいね、希は」

ええ、ウキウキしてましたとも。そらバレるさ。

ハハ！

「でもずるいと思わない？私、前に桂と会いたって言ってたのに、自分ばあっかりで」

姫咲の目がギリりと光る。

「そ、それはっ……」

お前がいるとうるさいんだもん！

なんて本音は胸の底胸の底。

たじたじ状態ながらもなんとか誤魔化そうと頭をフル回転させるが、言い訳は思い浮かばず。

どうしようかと焦りに焦った時、松永達がお化け屋敷から出てきた。

「あ」

と小さく呟いて桂がそちらを見やる。

つられて姫咲と社もそちらを見、松永と清田に面識のある姫咲が「わっ」と小さく叫んだ。

松永と清田が俺の友達で、もちろん同じ学校だという事を知っている姫咲は慌てた。

「やあちゃん、バレちゃう！」

「えっ？」

姫咲が慌てて社にそう言うと、社は一瞬わけが分からないという

顔をしたが、すぐに理解した。

「ああ。じゃあ、また今日帰ったらな、希。桂も身体に気を付けろよ！」

「またね！桂！」

口早にそう言って、2人はさっさと遠くへ行ってしまった。

姫咲が慌てた理由は、学校に社との関係が知れ渡る事を恐れた為。

この2人が制式に結婚するのはあと2年先の事。

姫咲が高校生の間は、社と夫婦である事も、一緒に暮らしている事も隠し通すと決めているらしい。

それが2人にとってのケジメなのだとか。

もしここで、姫咲と社が一緒にいる事を松永と清田に突っ込まれた場合、幼馴染みという理由では済むはずがない。

なぜなら姫咲と社は2人きりでテーマパークに来ており、しかも社は25歳。

“幼馴染み”という関係だけで、こんな所に2人っきりで来る人なんて……大人なんて、そーいやしないだろう。

どう考えても怪しまれるのがオチだ。

だから、2人は慌てて立ち去ったのだ。

第10話..桂の傷

助かった……

素直に胸をなで下ろす。

今だけは、松永の姫咲ファンっぷりに感謝だ。

でないと、姫咲が2人と面識できるわけがなかったらうから。

「おー、希。お前大丈夫か？」

「は？何が？」

松永が開口一番に妙な事を訊いてきたもんだから、キョトンとなつて聞き返す。

大丈夫って、何が？

「何って、具合悪いって桂さんが……」

「え？」

桂が？

そう思って桂を見ると、桂は思い詰めたような表情で遠くを見ていた。

その視線の先は、姫咲と社が去った方向であつたが、その目は何

も映していないようだった。

だからといって、ボーツとしているのではなく、ただ心の痛みを耐えるように唇を引き締めている。

ああ、何という事だろう。

桂は姫咲と社が結婚した日以降、2人一緒の所に会ってはいない。

今日初めて、夫婦となった2人を見たのだ。

……痛いに違いない。

「……桂？」

だけどその事には触れず、気付かないフリで桂を呼ぶ。

「……えっ、何？」

ハッと我に返り、桂は俺を見た。

目の周りが少し赤いような気がするが……気にしない。

気付かない。

今はまだ、気付くべきでない。

「俺、具合悪いって言ってくれたの？」

できるだけ優しい声音で訊ねる。

先程まで意識の中にいただろう桂に刺激を与えぬよう、ゆっくりと。

「……」

いつとき、桂は何の事か分からないようで、目をパチパチさせて考えていたようだが、すぐに「ああ」と思い出した。

「ええ、だって……そうだったでしょう？」

本気なのかそうでないのか。

少しだけ微笑んで、反対に俺に問い返してきた。

「……まあね」

その仕草が、さっきまで心を痛めてると思っていたくせに、やたらと可愛く思えてドキツとする。

だからそういうふうにしかな答えられなくて、間抜けな感じになった。

あー……恋って、人を情けなくするんだろうか？

「もう、大丈夫だけどね。……桂は？」

自分の事は考えない彼女だから、少し不安になって訊ねる。

「……大丈夫よ。ありがとう」

そう微笑んだ桂は儚く、今にも崩れてしまいそうなガラス細工に見えた。

このまま“桂”が消えていくのではという不安が俺の中に生まれる。

桂……

「でも、ごめんね。ちょっと……気分がすぐれないみたいで……先に、帰るわ」

桂がみんなに向かってすまなそうに微笑む。

「え、大丈夫？ ケイちゃん？」

海堂さんが心配そうに声を掛ける。

「一緒に帰ろうか？」

神野さんも、心配して桂の顔を覗き込む。

桂はまた、儚げに笑って

「ううん、大丈夫よ。2人は楽しんで？ ね？」

2人の為に、平気を装う。

「ごめんね」

最後に一言、そう笑って桂は出口に向かって行った。

しばらく、俺達はこれからどうしようかという話をしていたけど、俺は帰る桂の事が気になって、

「悪い。俺も帰るわ。桂、心配だしさ」

そう言って、俺は桂の後を追いかけた。

松永と清田は何か言いたげに口を開きかけたが、そこは男。

ぐっと堪えて「またな!」とだけ俺の背中に声を掛けてくれた。

この2人には、俺が桂に惚れているという事がバレてしまったかもしれない。

別に隠しているつもりはないから、どうでもいいことだけど。

出口ゲートの手前。

俺は桂に追い付いた。

「桂っ!」

名前を呼ぶと、桂はすぐに振り返り、立ち止まった。

「希……」

彼女は「なぜ?」と問う目をした。

「なぜ」って、心配だからに決まってるのになあ。

……ホント、自分の事は考えないんだから……愛しいに決まってる。

「一人で女の子を帰すわけにはいかないだろ」

駆けてきたせいで肩で息をしまして、スムーズに言うのに苦労する。

それでも、スムーズに言えたと思う。

「……希の方がむしろ危ないと思うんだけど……」

「え？」

桂の言葉の意味が分からず、聞き返す。

桂は俺の後方に目を向けていて、困ったように笑っていた。

だから気になって俺は振り返る……と……

「君、大丈夫？」

「そんなに慌てて、何かあったの!？」

「俺でよければ協力するよ」

俺をナンパする為に近付いてくる男達がわらわら……。

俺はそんなに、男ウケする顔ですか!?

と、思わず涙ぐみたくなる光景に、自分が情けなくなる。

目の前にこんな美人の桂がいるってーのに何で俺!?

「あー……大丈夫だから、充分、何も必要ないから。てか俺男なん
で、サヨナラ!」

キッパリと抑揚のない声音で返事をして、
俺は桂の手を掴んで急いで出口ゲートをくぐり、TOYOSHIMA
Aの敷地内から足早に外に出た。

数分歩いた所で、桂の手を放す。

「希」

と静かに呼ばれて我に返ったから。

しばらく手を繋いでいたのかと、無自覚だった事を後悔しつつ、
バクバクいう心臓を抑えようと、気付かれないように深呼吸した。

「ごめん、いきなり出て来ちゃった」

落ち着いた所で謝罪の言葉を述べた。

あまり本気でごめんとは思っていないけど。

何と言っても、どさくさに紛れて桂の手を握れた事はとても嬉しい
事だったから。

「いいのよ。それより、大丈夫？」

「何が？」

俺が心配して桂を追いかけてきたはずなのに、逆に「大丈夫？」と訊かれてしまい、よく分からずに聞き返した。

「走り通しで……」

心配そうな表情……

というより、目だな。

心配そうな目で俺を見る。

優しく、思いやりのある桂。

心配してくれてありがとう。

でも、心配すべきは君の方なんだよ？

「ああ、大丈夫。まだまだ若いからね☆そういう桂こそ、いきなり走らせちゃったけど、平気？」

「ええ、平気よ。ありがとう」

桂が微笑み、和やかな空気が流れる。

「じゃあ、帰ろうか？送ってくれるんでしょ？」

そのままの家顔で桂は言った。

「もちろん。学校……でいいのかな？」

「ええ、学校で」

今の時間は12時前。

今日遊ぼうと誘った時に門限は5時だと聞いている。

だから、あと4時間ちよつとは学校に帰る必要はない。

時間はまだたくさんある。

それに、姫咲と社はTOYOSHIMAの中。

今なら……少しくらい、実家によってもいいだろうに……。

「家の方には、顔出さなくていいの？おばさん達、寂しがってるよ？」

姫咲はウチへ嫁に来ちゃってるし……

心の中で付け加えても言葉にはしない。

桂が傷付くのは分かり切ってる事だから。

「うん……いいの。お盆には帰るし、ちょっと、疲れたから」

「そっか。なら、仕方ないね」

「疲れた」というセリフにズキッ……と胸が痛む。

桂は気付いているのだろうか？

俺が桂の痛みに気付いている事を。

いや、そんな事はどうでもいい。

確かに桂は、俺の前で強がりはしても言葉や態度の端々で感情を伝えてきてくれるのだから。

今はただ、そんな彼女を包み込んでいたい。

「……希」

「うん？」

「……………ありがとう」

「……うん」

しばらく俺達は黙って歩いた。

静かな空気を纏って歩く俺達に、太陽はじりじりと光を照らす。

じりじりじりじり……

暑い。

汗が出る。

それでも静かに歩く桂の顔は、夜空に輝く月のように白く、涼しげだ。

燃える事もなく、焦げる事もない月。

太陽に照らされ輝く事で、その存在は夜の中で主役を張る。

静寂のヒロイン。

“桂”という少女は、そんな月を思わせる。

静かに、穏やかに存在する彼女。

その裏側は、誰も見る事が出来ない。

そう、彼女自身がそれを照らさない限り。

俺と桂は学校までの道のりを、互いの存在だけを感じながら静かに歩いた。

太陽が熱く熱く輝く下を。

第11話：社と姫咲

「ただいまー♪」

午後9時前、明るい声が玄関先で帰宅を告げる。

姫咲と社が帰ってきたのだ。

「ただいま、お義母さまお義父さま」

居間の襖を開け、正座をして両親に帰宅の挨拶をする。

こういう礼儀はきちんとして、あとはとにかく天真爛漫で明るいやつだから、俺の両親も祖父母も姫咲の事を可愛がっている。

特に父は、社に家元を継ぐ決心をさせるのに一躍買う結果となった姫咲に感謝すらしていて、きっと姫咲が何かやらかしてしまっても目を瞑っているんじゃないだろうか。

「おかえり、姫咲ちゃん」

両親はほくほくとした顔で挨拶を返す。

姫咲はそれに笑顔で応え、次に俺の所まで来て、ワザワザ抱き付いて、

「ただいまー、希」

と言ってきた。

計3回、姫咲の「ただいま」を聞いた。

一人一人に挨拶する所は律儀だと思うけど、俺にしてみればちょっとしつこい。

ま、だからって冷たくあしらうなんてことはしないけど。

ここでは姫咲様がルールですから。

「はい、おかえり。兄ちゃんもおかえり」

「おう、ただいま」

姫咲より少し遅れて居間に入った社に目をやる。

社は微笑み、両親にも丁寧に挨拶した。

両親は笑顔でそれに頷く。

兄、社は中学生の終わり頃から反抗期に入り、その継続で高校からはお茶の稽古に行かなくなり、バイトだ遊びだと近頃の学生らしく青春を謳歌していた。

大学は両親が知らないうちに決めて進学し、高校のバイトで貯めたお金で学費を出したり、生活もギリギリの所でやっていたという。

それでもたまに、俺達の前には現れて優しくしてくれた。

社は実家が茶道の家元であったが為に、その雁字搦めの家が窮屈

で、まして嫡男であるという重圧に耐えかねて、爆発したのだ。

当然そのまま実家から離れ、一般企業に就職し、そこそこの女性と結婚し、ごくごく一般的な家庭を築くつもりだったらしい。

だが、この社の予定は一人の少女によってぶち壊された。

その少女こそが、当時中学2年生だった姫咲だ。

姫咲は小さい頃から社の事が好きだった。

もちろん、最初のうちは兄のように慕っていただけなのだろうが、そのうち……

俺の推測では小学4年の終わり頃からは本気で、“恋”という意味で好きになっていたと思われる。

それは社が大学に進む事が決まった時の事だ。

姫咲は泣いた。

社が自分の傍からいなくなることを知って、実感して、彼女は泣いた。

泣いて、女になった。

彼女が桂にコンプレックスを抱いたのはその2年後の事である。

彼女の心が女だったからこそそのコンプレックスで、あの乗り越え方もできたのだと思う。

そういう意味では、桂はまだ少女のままだ。

俺に抱き付いていた姫咲はすぐに離れ、祖父母のいる離れへと向かった。

その手には祖母の好きなおまんじゅう。

土産に買ってきたのだろう。

しばらく祖父母の所でおしゃべりしてくるつもりに違いない。

まったく、社交性抜群なやつだ。

午後10時を回ってしまった頃、姫咲は寢床につく。

彼女曰く、

「早寝早起きはお肌の基本！」

だそうで、本物の主婦になるまではこの生活習慣を崩すつもりはないらしい。

社は姫咲と同じ部屋で寝るのだが、いつも12時を回ってからでないと寝ない。

その間、どこで何をしているかと言うと……茶室で一人、お茶の稽古を浚っている。

彼は高一から大学を卒業してしまうまでの7年間、稽古はいつさ
い受けていない。

7年のブランク。

家元を継ぐ為、彼はほぼ毎晩、一人黙々と稽古を浚う。

もともとセンスのある人だから、もう大分、勘は取り戻しているのではないだろうか。

ほぼ毎晩、やってるのだから。

でも……“ほぼ”という事はたまに稽古でない事もしているという事。

そう例えば……

「希、入るぞ」

「……」

と、いきなり俺の部屋にやって来たり、だ。

たいてい、そういう時は姫咲と桂について話したい時と決まっ
いて、正直に言うのと、ちよつと構えてしまう。

実の兄と話すだけだというのに。

第12話：社と希の会話

「……返事、してないんだけど」

「入るぞ」と言っただけに入ってきた社に、一応注意する。

した所で何の効果もない事は百も承知であるが。

「そう固い事言うなって」

困ったように笑って、机に向かっていて俺の頭をくしゃりとする。

姫咲といい、社といい、友人2人といい……

俺の頭はそんなに撫でやすいですか？

確かに一番チビだけど……。

「常識だと思うけどね？」

「まあまあ、いーじゃん、兄弟なんだし。恥ずかしい事は何もない！
ま、女という時は別だけど」

そう言ってウィンクをすると、机の横に付けているベッドに腰掛けた。

我が家で俺の部屋だけが様式で、あとは全部和式だ。

なぜ、俺の部屋だけがそうなのかは知らない。

ただ……昔からそうなのだ。

社は嫡男と言う事もあってか、幼少の頃よりお茶の稽古に出ていた。

それに引き換え、次男だからなのか、それとも社と9つも離れて生まれたせいなのか、あるいはそのどちらもなのか知らないが、俺はたしなむ程度を遊び半分で教わっただけ。

それは今も変わらず、俺の気が向いたらやろうか……程度でしかない。

俺にお茶のセンスがあるとは思わないが、ここまで両極端だと疑問もわく。

だから以前、この事について両親にも祖父母にも訊いてみた。

しかし、うまくはぐらかされて終わり。

何か隠す理由でもあるのだろうか……？

不信任は強まるばかりだ。

だからなのか、最近の俺は社にとって可愛くない弟だと思う。

また、両親らに対しても、可愛くない態度を取っている気がする。

……いわゆる反抗期？

自分でもよく分からない。

「……で、何の用？」

机に向かったまま訊く。

明日の補習の予習を続けようとするが、頭が勉強を拒否して手が進まない。

頭も、神経も、これから話そうとする社に向かっていて、何だかんだ言いつつ、兄弟だなと思う。

2人して、好きな娘を守ろうと必死になっている。

兄弟って、似るもんだ。

「んー、大した用じゃねえけど……」

「大した用じゃない」？嘘ばかり。

そう思っても、黙って続きを待つ。が、大体の予想は付いてる。

「今日、桂と会う事何で黙ってた？」

ほらやっぱり。姫咲と桂の事。

やっぱり……姫咲本位だよなあ、兄ちゃん。

「何でもかんでも言わなきゃいけないの？」

質問に質問を返す。あんまりいい事じゃない。

可愛くない。

「別に、そういうわけじゃねえけど、姫咲が……ヘコんでんだよ」

「姫咲か？」

思わず聞き返した。

だって、あの天真爛漫を絵に描いたような姫咲が、“ヘコむ”……？

うそだあ。

「姫咲が。ホントに」

俺が「うそだあ」と思ったのが分かったのか、社はまた困ったように笑う。

「希には分かんないかもしれないけど、俺には分かるんだよ」

そう言って、社は目を伏せた。

今日一日を……桂と会って別れてからの姫咲を、振り返っているに違いない。

「俺には、今日の姫咲はやたらと元気に見えたけど？」

正直な感想を述べた。

実際、今日TOYOSHIMAで会った時も、家に帰ってきた時も、姫咲のテンションは高かった。

……テンションが高いイコール、姫咲は元気っていう方程式は成り立たないって事？

「まあ、パツと見は元気だよな。目なんてキラキラさせて話すし、よく動くし」

何か思い出したのか、社がクスツと笑う。

でもすぐに真顔になって、

「……でも、実際は違う。ま、どう違うかは内緒な。お前まで姫咲に惚れられちゃだし。

でもヒント！落ち込んでるから無理矢理テンション上げてるなんていう単純なもんじゃない」

にやり。と社が笑う。

意味不明だ。

「ヒントって……ヒントじゃないし、そんなの。てか、絶対に姫咲に惚れたりしないし」

断言してやる。当然だ。

俺が惚れてるのは……心を痛めてすらも想ってしまう人は、桂し

かないんだから。

「そんなつっぱねるなって。ま、とにかく、俺には……俺だけには分かるのよ、姫咲の気分が」

愛しい姫咲を思って優しく笑む。

兄ちゃんがモテるわけが、なんとなく分かった。

カッコイイわ。

「兄ちゃんにだけ、ねえ……」

「うん」

社にだけ伝わる姫咲の心？俺にだけ伝わる桂の心？

その反対はないのだろうか。

でも、確かに「愛しい君の心」を感じ取る力が俺達兄弟にはあるようだ。

俺も、桂の気持ちを考えるし、社も姫咲の気持ちを考える。

互いに、カワイイ彼女を中心にして物を見ている。

やっぱり、兄弟だ。

「で、元気印の姫咲がへこんでるって、どうして？」

本題に戻す。

「ああ……」

社はいつとき、何と言うべきか言葉を探して黙り、素直に俺は待った。

数十秒後。

「姫咲と桂、それこそ頻繁につてわけじゃねえんだけど、メールでやり取りしてるの、知ってるか？」

と、どこか本題から逸れたような質問をしてきた。

メール……そう言えば、そんな事を聞いた気がしないでもない。

「うん。直接そういうふうに聞いたわけじゃないけど……ああ、もしかしてそのメールってほとんど姫咲からのだったり？」

「そ」

俺の質問に簡潔に答える。

答えを聞いて、なんとなく分かった気がする。

社が言わんとしている事が。

「もしかして、姫咲の事だから自分の一方的な話をメールで送ったり……？」

最後まで言わず、目で訊ねる。すると案の定、

「そう」

と、なんとも困っているような表情で頷いた。

そうだ。姫咲の事だ。

どうせ、いやきつと、絶対に、メールの内容のほとんどが社絡みに決まってる。

「やあちゃんと」「やあちゃんが」「やあちゃんに」「やあちゃんは」……そんな言葉で始まるメールがすぐに浮かび上がる。

「しかも桂は桂で、姫咲の話に相槌打つとか質問に答えるばかりみたいで……つまり今日の事も、聞いていないんだよ。希からはもちろん、桂からも」

なるほど。合点がいった。

つまり社が言いたい事は、今日俺と桂が一緒だったという事を事前に桂が姫咲に報せておらず、

しかも俺も言っていないで、さらには偶然会う事がなかったらもちろんその事を知らなかったかもしれない姫咲が、だからヘコんでる、とそういう事だ。

桂、メールしなさそうだもんなあ……

「つまり俺って、とばっちりだよな」

ちょっとゲンナリして言うと、

「ま、そうとも言うな」

と事も無げに社は応えた。

……兄ちゃんは俺の事がカワイくないと見える。

「でもお前が一言でも言ってくれば……」

「言うわけない」

社が最後まで言い切るのを途中で打ち切る形でズバツと言った。

言ってしまったって後悔。

ほら、彼は驚いたように目を丸くして俺を見る。

俺だってビックリだ。

「……何で？」

訊かれる。

当然だろう。

「気分」

だから、「言うわけない」と言った同じ調子でそう言い切る。

できればなああで終わらせたい。

だから深い理由が必要ないと思われる言葉を選んだ。

「気分” って……お前……」

案の定、社は呆氣にとられて何も言えない。

「いいじゃん、別に。俺はね、いい加減うんざりしてるんだよ、姫咲にね。ある意味桂にもだけど……でも特に姫咲は、兄ちゃんがいるんだし、そろそろ桂離れすべきだと思う。兄ちゃんは、そう思わない？」

少しだけ、俺の本音をさらけ出す。

この事だけは、言っていていいだろうと思うから。

いや、言っておくべきだ。だって社は姫咲の夫で、たぶん彼も、少しは考えている事だろうから。

「希……お前って、もしかして随分と大人なのか？」

「は？」

社の言葉が俺の期待していた言葉でなかった事、且つ意味不明な為思わず間拔けな声を出してしまう。

いやいや兄ちゃん、つつこみ所違くねえ？

と心の中でつつこんだ所で本に分かるはずがない。

「いや。そりゃ俺も2人についてそういう事考えるけど……でもそれって結構最近のことだぜ？2人が高校入って離れてしまってからやっと、姫咲の桂依存度が明確になったから、そういうふうに考えるようになったけど……」

「俺だって同じ頃に考え始めたよ」

「お前、希、今いくつだ？」

「15」

「……精神年齢高過ぎなんじゃね？」

俺の心はおっさんだと言いたいんだろうか。

「そういうあんたはいくつ？」

ちよつとムツとしたので反対に訊ね返す。

「今年で25」

「精神年齢低過ぎなんじゃね？」

「……言うねえ、お前も」

「兄ちゃんの弟だしね」

「俺って、イヤミ？」

「自覚なし？」

「うん」

「タチ悪」

「すまん」

「……」

「……」

何だか変なやり取りをしてしまって、2人して押し黙る。

いや、だからそういう事話したいんじゃないかって……てか本題から逸れまくりだから！

「いや、てか、そうじゃなくてさ、結局兄ちゃん何を言いに来たわけ？」

とりあえず本題に戻す。

社は「ああ」と思い出したように小さく声をあげ、改めて俺の方を見た。

「ま、つまり俺が言いたかったのは……俺は姫咲を傷付けたくない、ってことだな」

「は？」

いや、話が飛んでないか？ いっきに。

俺の疑問が顔に書かれてあったのか、社は小さく笑って続けた。

「さっき希が言った事、俺言うつもりだったんだよ」

「え……」

驚く俺に、また社は小さく笑う。

笑い方がどこことなく、桂に似ている気がする。控え目に笑う所が、なぜだか似てる……？

ふと思い出した。

小さい頃、それこそ幼稚園ぐらいの頃、その頃まで桂は、社に素直に好意を抱いていた事を。

なぜ、今のようになってしまったのか。

新たな疑問が浮上した。

そんな俺に気付かない社は、さらに話を続ける。

「うん。そう、だからさ、俺も桂と引き離してあげたいわけよ、姫咲を。」

だから……できるだけ今は、会わない方がいいだろうな。卒業するまでに、どうにかこうにか諭そうと模索中☆」

言って、ウィンクする。

俺にしてどうする。

ドキリ！

なんてしないぞ！

てかむしろ寒気が……いや、ウソ、冗談です。

「それでできるだけお前にも協力してもらいたくなって思ってさ。言うまでもなかったみたいだけど。

ただ、今日みたいに希とか、姫咲も知ってるような人といるとバツタリ……というのは避けたい。

姫咲が傷付く。ああ見えて意外に、弱いんだ」

姫咲の傷を思ってか、社が辛そうに眉根を寄せる。

本当に惚れているのだと実感する。

「うん……分かった。俺だって、気持ちと同じ」

「え？」

今度は社がワケが分からない、という顔をする。

「ま、いいじゃん？ 利害一致って事で。てか俺、明日の予習しなきゃなんだけど」

「え？ あ、そうか。そうだよな。悪い、邪魔した。じゃ、明日な」

「おやすみ」

「おう。おやすみ」

社が納得して切り上げたかどうかはさて置き。

俺の言葉、あまり深くとらないでくれればいいけど……。

それにしても姫咲のやつ、随分と愛されてるじゃないか。

何が足りなくて、何を求めて桂を繋ぎ止めようとしてるのだろうか？

それとも無意識？

じゃあ、その意識下で、何を思っているんだろうか。

桂と離れる事が、ワケもなく不安なのだろうか？

……そうかもしれない。

人と繋がっておく為に、理由はないのかもしれない。

それはもう本能みたいなもので、

恋愛みたいなもので……

なぜ好きになったの？

と訊かれて答えきれないのと同じことなのかもしれない。

だとすると、厄介だ。

第13話..お盆休み突入

8月13日、補習はお盆休みに突入した。

と言っても、たかだか3連休、そこまで嬉しくない。

TOYOSHIMAの件以来、俺は桂と会っていない。

もともと普通科と商業科に別れた校舎の接点は少なく、
通常でも商業科の人とすれ違うのは、下足室や体育館、グラウンド
などといった共同で使用される場所だけだ。

まして合宿中の織女の生徒はほとんど校舎の外に出る事はない。

補習初日に会えたのは奇跡に近い偶然だったんだ。

しかも、俺は桂の携帯番号もアドレスも知らない。

連絡なんて取りようがないから、当然会えないというわけ。

ちなみに、松永と清田はTOYOSHIMAでちゃんと番号とアドレスを交換したらしく、マメに連絡を取り合っていたようだ。

その様子はニヤケていて、だらしがなかったことは言わずとも分かる事だろう。

さて、織女もお盆休みに入っただろうから、桂も今日から、3日間、こちらへ帰ってきてもおかしくないのだけど……

帰ってきたとは聞いてない。

まさか15日まで帰ってこないなんて思わないけど……まさか、ね。

もしこのまま帰ってこのまま帰ってこなかったりしたら……

「桂が帰ってこない。メールもない」

ぶすつと不機嫌な姫咲。

これがエスカレートして、しまいにゃ八つ当たりされかねないのが我が家での俺の立場。

絶対、俺は損してる。

「いろいろ、忙しいんじゃないの？ 織女だし、もしかしたら今日まで合宿してるとかさ」

とりあえず、当たり障りのないだろう言葉で宥める。

現在、社は仕事でおらず、両親は稽古を見てて、祖父母はお墓参りに行って2人つきり。

男と女が一つ屋根の下に2人きり。

確実に、絶対に、“間違い”が起こらないのが妙なトコ。

いや、姫咲とどうこうなりたくはないけどさ。

「何でそんなに勉強するのよ」

ぶすつとしたまま不機嫌な声で言い、俺を睨む。

いや、俺を睨んでも仕方ないから。

てか、そんな俺が知るわけないから、やめて、お願い。

「頭の良いトコだからじゃない？」

当たり障りのないよう答える。

“ 触らぬ神に祟りなし”。

今、ものっ凄くそんな気分。

どうか神様、いるのならこの人の不機嫌なおして！

高校生にまでなって俺、この人のサンドバッグにはなりたくないんだって！

なんて、ちょっと泣きたい気分。

……泣いていい？

「何で！」

「何で」 って言われても知るかよお！

そんなん学校に聞けバカァ！

思っても言葉にしない、顔に出さない。

俺の平和を守る為、頑張るんだ希！！

「何でって俺に訊いても仕方ないじゃん。

優秀な人ができるだけたくさん社会に排出できるように頑張ってるんじゃない？

桂もその一人なんだよ。頭良いし、社会に貢献すべく、頑張ってるじゃん。

応援してあげなよ」

とにかく、姫咲の感情を逆撫でしたりしないように優しく諭す。

頼む、これで納得してくれ！！

そう祈った時、玄関の呼び鈴が鳴った。

ビーッ

という、何か引き裂いたような音に反応し、姫咲はパッと立ち上がり、来訪者を迎えに行く。

姫咲からの追及を逃れる事ができて少しホッとしながら、俺も姫咲の後に続いて玄関へと向かった。

「桂！！」

姫咲の驚きと喜びが入り混ざった声を聞き、慌てて玄関を見るとそこに立っていたのは真夏だというのに日に焼

けた形跡を見せない真っ白な肌をした美少女、桂だった。

玄関に立っているためか、後ろから光が射し込んでいて、まるで桂自身が輝いているように見える。

「桂……」

思わず、溜め息混じりに名前を呼ぶ。

桂が淡く、微笑んだ。

……モナ・リザみたいだ。

そんなバカな事を思うのは恋してるからか。

「姫咲、ただいま。それから希も……ただいま」

にこりと微笑む。

後ろから射し込む光のせいかな、あるいは彼女の微笑が眩しいのか、俺は知らず目を細め、

「おかえり」

と一言だけ呟くように言った。

もちろん、姫咲は桂に飛びついて

「おかえり!!」

と元気いっぱい彼女を出迎えた。

家の中に招き入れ、居間へ通す。

その時、桂が持っていた荷物を俺は預かって運んだのだが、その行動に桂が苦笑したのを俺は見た。

「やっぱり教育されてる」

とも思っただろう。

その通り、この行動は姫咲による教育の賜物。

でも……相手が桂だからっていうのも理由に挙がるけど。

「おじさんやおばさんは？」

座るなり、ここの家主がいない事に気付いた桂は訊ねた。

「お稽古見てる。おじいさまとおばあさまはお墓参り兼デート♪やあちゃんはお仕事で、私と希2人つきりだからもう暇で暇で」

身振り手振りで姫咲が大袈裟に説明し、溜め息まで吐いてくれた。

それに、桂がおかしそうに笑う。

小さく、小さく、笑う。

てか一緒にいるのが俺だとそんなに暇ですか？姫咲さん……。

いいけどさ、別に。

「でも桂、何で帰ってくるって連絡くれなかったの？」

今度は拗ねた顔で桂に訊ねる姫咲。

やっぱり、表情豊かな奴だ。

訊かれた桂は、少し微笑んだ顔のままゆっくりと答えた。

「携帯の調子が悪いみたいで、電池がすぐ切れちゃうの。だから学校にいる間に切れちゃって連絡取れなくて……。ごめんね？心配させたかしら……。？」

「うーん……。心配したのもあるけど、嫌われちゃったのかとすごく不安になった」

しゅん…とおとなしくなつて桂を見る姫咲。

恋人同士じゃあるまいし、何を不安がるのだろうか？

「嫌われる」なんて、ありえないこと。

「そんな、嫌ったりしないわ。姫咲の事、大好きよ」

にこりと桂が笑う。

すると姫咲はパツと輝くような笑顔になった。

「ほんと！？私も大好きよ、桂☆」

ぎゅうつと桂を抱き締める。

バカップルめ……

なんて、ただのヤキモチ。

桂が笑っていられるなら、これでもいいじゃないか。

「あ！そうだ！今日の花火大会、みんなで行こうね！」

思い出したように姫咲が言った。

8月13日、毎年この日は俺達が住む町で花火が打ち上げられる。

と言っても、もの凄く小規模なのだけど。

それでも小さい子供からお年寄りまで楽しめるお祭りだ。

俺達も幼い頃、社に連れられて何度か見に行った。

そう言えば、ここ3、4年は行った覚えがない。

久しぶりに花火大会に行くのも悪くないかもしれない。

そんな事を考えていると、桂が姫咲の言葉の中に何か引っかかりを見付けたのか、姫咲に訊ねた。

「“みんな”って？」

“みんな”という言葉が気になったらしい。

しかし、聞かずともその“みんな”が誰を指すのか、彼女には分かっているようだった。

表情が少しだけ、ほんの少しだけ固くなっている。

姫咲はそれに気付かず、上機嫌に答えた。

「私と桂、それから希とやあちゃんの4人♪」

案の定、“やあちゃん”……社の名前が挙がった。

一瞬にして、桂の顔が曇る。

「4人……？」

ポツリと、独り言のように訊ねる。

微かに、声が掠れていると思ったのは俺の気のせいだろうか？

「そう！久しぶりに4人で行こうよ！もうお義母さまにも浴衣、出してもらってるんだよ。もちろん、みんなの分ね♪」

何も気付かない姫咲は一人キャツキャツとはしゃいでいる。

そこで今度は俺が引つかかった。

「えっ？みんなって……俺も浴衣着んの？」

「当然！」

「ええっ!？」

ヤダッ! ハズい!! せめてジンベエだろ!?! この歳で浴衣なんて
……しかも男で……絶対に浮くってえ。

「それは俺、ちょっと……」

「却下！」

「……」

「ヤダ」と言いきる前にズバツと切られ、何も言えない。

姫咲様の権力は絶大だ。

「みんな……希も、来るのよね？」

俺と姫咲の会話が聞こえていなかったのか、桂が強張った表情のまま俺を見る。

その瞳は心細げに震えている。

桂……。

弱い桂を目にする度に、俺の心は痛くなる。

いっそ、腹を切って死にたくなるほどに。

でもきつと、桂は俺よりもつと痛いに違いない。

だから俺は我慢する。我慢して、微笑むんだ。

「うん、そうだよ。しかも浴衣着てね。だから、桂も行こう？ 姫咲達の中に一人だけ入るなんて、そんな勇氣は俺にはないんだ」

桂を苦しめないように、少しおどけるようにして彼女を誘う。

桂、一緒に行こう？ 行っても、行動を共にしなければきつと、平気だよ。

だから、行こう？

心の中で強く、念じるように語りかける。

伝わるなんて思っていない。

伝わらなくていい。ただ、感じてほしい。

「希……。うん、じゃあ、行こうかな」

俺の気持ちを感じ取ったのかどうかは定かじゃない。

だけど桂はそう言って笑ってみせた。

心細いような、でもほっとしているような、そんな笑顔。

……少しは、俺の存在が彼女の安らぎになっているといい。

「やった！じゃあ決まりね♪そうだ、浴衣、今日の為に買ったんだよ、私と桂の分。ね、向こうに掛けてあるから見に行こう？」

桂の返事を聞くやいなや、マシンガントークの勢いで桂を奥の座敷に連れて行こうとする。

桂はそれに合わせて立とうとする姿勢を見せながら、

「ええ。じゃあ、先に行ってて？」

そう答えると、姫咲はウキウキとリビングを後にした。

「桂、どうかしたの？」

一緒に行ってもよかっただろうに、ここにしばらく留まる事にした彼女を不思議に思い、訊ねた。

「え？ううん、どうもしないわ。ただ……姫咲のいる前では言えないから……」

「え？」

言っている意味が分からず、聞き返す。

すると桂は、少し照れるかのように笑って、

「ありがとう、希」

と言った。

最初、「ありがとう」の意味が分からず、キョトンとなった。

でもすぐに、さっきのやり取りの事を言っているのだと思った。

「気を遣ってくれて、ありがとう」

ということだろう。

別に、気を遣ったわけではない。

正直に言えば、桂の浴衣姿が見たいという下心もあった。

桂、もし今日、君がとてつもなく傷ついたりしたら……それは全て俺のせいだよ。

だからその時は容赦なく、俺を罵ってくれていい。

だから先に謝っとくよ。

傷付けるようなこととして、ゴメン。

「かつらー！」

奥から姫咲の桂を呼ぶ声が聞こえる。

辛抱の足りない奴だ。

呼ばれて、桂は俺に少し笑う事で姫咲の元へ行く事を告げ、勝ち気で我が侬な、だけど誰からも愛される愛しい妹の所へと向かって行った。

第14話…浴衣

太陽がオレンジ色に燃える頃、一般会社員の社が帰ってきた。

桂がいる事に少し驚き、しかしすぐに柔らかく笑って、「おかえり」と言った。

むしろ「おかえり」と言われるべきなのは彼の方だというのに。

俺の両親の手前、無視できないと思ったのか、桂は無表情に、だ
がはっきりと「ただいま」と応え、

「……おかえりなさい」と社に返した。

もちろん社はそれに優しく応じた。

社は前々から姫咲に祭の事を聞いていたようで、姫咲がウキウキ
した様子を見て、

「皆、揃って行ける事になった？」

と、どちらかと言うと恋人というより子供に対するような甘く優
しい声で訊ねた。

本人は“子供に対するような”気持ちではないのだろうが、ハタ
から見ればそう見える。

それだけ社は姫咲に心を許しているという事なのだろう。

「うん。桂も希も、浴衣着るって♪」

姫咲の言い方はまるで俺達が進んで浴衣を着るみたいな言い方だ。

違うだろ。無理矢理じゃん。「却下」とかってにべもなく切り捨てたのはどこのどいつ様ですか？ねえ？

つつこみたい思いはいい。

だけど、睨まれるだけに終わるのは分かり切ってる事なので、俺は諦める。

人生、諦めが肝心だ。うん。

「そっかぁ。楽しみだな」

「うん♪」

新婚夫婦はほのぼのとしたオーラに包まれている。

バカップルだなぁ、ホント。

我が兄ながら、とことん情けない。

なぜそこまで姫咲に惚れているのか。

……なんて、俺も人の事言えた義理じゃないけれど。

祭の露店でりんご飴は何だと買い食いをする為に、いつもよりも少なめの晩御飯を済ませると、おのおの浴衣に着替え、出掛ける準備を整えた。

姫咲も社も俺も、浴衣は自分で着れる。

唯一それができない桂は、俺の母に着付けしてもらった。

「おお。やっぱ夏の女は浴衣だな。似合う似合う、カワイー♪」

心から思っているのか、それとも単にオヤジなだけか。

社が浴衣を着た姫咲をべた褒めする。

もちろん、桂に向けてのセリフでもあるが。

「やあちゃんもカッコーよ♪」

バカップル。

互いの浴衣姿を褒め合って恥ずかしくはないのか！

と、思うものの……

「桂、似合ってるね」

「希も、なんか色っぽいわ」

互いに一言ずつ交わす俺も、同類か……。

「色っぽい」と言った桂は、それこそ色っぽく、艶やかに小さく笑った。

ただ浴衣を着ただけというのに、なぜこうも雰囲気が変わるのか。

“変わる”？いや違う。この場合は“増す”んだ。

普段の桂は大人っぽく、所々色っぽくて艶っぽい。たまに見せる「色気」に俺は必ずドキリとする。

浴衣というアイテムは、この“たまに”を“常に”あるいは“強烈に”してくれるものらしい。

……俺の心臓、やられてしまいやしないだろうか……。

不安に思いつつ、しかしそれと同時に興奮もする。

男ってーのはバカにできてるもんだ。

呆れつつ、感心する。バカじゃないと恋もできない、楽しくもない、きつと。

桂が着ている浴衣は、藍色の布地に紫の……朝顔だろうか？
大きな花が所々に散らばった柄で、その色が彼女をより艶っぽく見せているように思われる。

藍色という、優しくも落ち着いているその色は、桂にとってもよく似合い、彼女の内側の闇を少しだけ覗かせているかのようだ。

だからこそ、色気が漂う。帯は黄色で、夜空に浮かぶ月を思わせた。

そんな桂の浴衣と対照的な浴衣を姫咲は着ていた。

明るい黄色地にピンクの朝顔が散らばった浴衣は姫咲によく似合っている。

イメージは太陽か。赤色の帯も、彼女の明るさを際立てている。

太陽と月。まさに彼女達の本質を見抜いたかのような浴衣。

小さい頃、やはり今のように対照的な浴衣を着ていた幼い2人を思い出す。

確か、色違いのお揃いだったと思う。たくさんの金魚が泳ぐ、白地の浴衣と藤色の浴衣。

昼間と夜のイメージの二つの浴衣を2人は着ていた。白地を姫咲が、藤色のを桂が着て、仲良く手を繋いで歩いていた。

その頃から、太陽と月、昼間と夜というように雰囲気の対照的な2人だった。

もしかすると、その頃から桂と姫咲は互いの違いを知っていたのかもしれない。

だって……2人は自ら、どっちの浴衣を着るのか選んでいたのだから。

「男なのに、色っぽいってやだなあ」

桂のセリフに苦笑いする。

この歳で、しかも男で、色っぽいと言われる俺ってどうなんだろ。

「そう？それだけ、希が魅力的って事なのに……」

にこりと笑って桂は言う。

着ている浴衣の効果なのか、彼女に一層の魅力と余裕を感じられてドギマギしてしまう。

ガキだなあ……

情けない事を思いながら言葉を返す。

「桂の方がよっぽど、色っぽいよ？」

「……ありがとう」

ストレートな言葉に驚いたのか、桂の頬がうつすらと紅色に染まった。

自分だって、ストレートに言ったくせに。

時々見せる……と言っても最近知ったばかりの、可愛い桂に身体の中を熱くする。

その熱は耳まで伝わり、俺も赤くなった。

言い慣れない事は、光の下で言うもんじゃない。

お互いにカッカと火照る頬を手で押さえながら、姫咲と社に促されて家を出る。

真っ赤な顔の俺達に気付いているのかいないのか。

2人は何もつつこんでこず、俺と桂の前を手を繋いで歩き出す。

その様子を見る限り、俺達が顔を赤くしているのに気付いてもつつこんでこなさそうだ。

なぜなら、2人は既にラブラブカップルモードに切り替わっていたから。

しばらくして火照りが収まった頃、そんな2人に気付いた俺は、隣を歩く桂を見た。

桂も火照りは収まっているらしく、いつものように白い肌がそこにはあった。

その瞳は真っ直ぐに前を見ていて……その先にいるのは当然、手を繋いで歩く姫咲と社の姿。

しかし彼女は、意識してかはたまた無意識にか、2人が歩く更に先の方を見ているようだった。

意識して2人の手を見ないのか。

それとも無意識に見ていないのか。

先程まで朱に染まっていた頬は、陶器のように滑らかな白に。

夕日がじりじりと照りつける中でその白さは際立ち、それは俺の

心を締めつけた。

痛い。痛い。

桂、痛いよ。

必死で感情を殺す、君が痛い。

夏の夕日に照らされて、暑くない人間がいるわけない。

それだけ、桂の芯は痛めつけられて、熱すら出ないほどに冷たくならざるを得ないのだ。

痛い……。

俺の中に、後悔が生まれる。

「浴衣姿を見たい」

俺のエゴ。

そのエゴの為に桂を誘い、安心させておいて結局は目の前の2人を見せつけるような事をして、傷付けてしまった。

自分のエゴなんて、無視すべきだったんだ。

夕暮れの中、祭の会場に向かって、ただ黙々と俺達は歩いた。

第15話..人混み

祭の本番は、午後8時から上がる花火だというのに、露店が並ぶ通りは大勢の人々でごった返していた。

所狭しと並んだ露店で、もともと狭い通りが更に狭くなっている。

「歩きにくい」と言うよりも「流される」という感じの人混みに、俺達は少し腰が引けてしまった。

「うっわ。多……！」

姫咲の感想は短いが、それだけ驚いている事が伝わりやすい。思わず唾をゴクツと飲んで頷いてしまうほどだ。

「こう人が多いとはぐれそうだなあ……」

4人の内で一番年長の社は、大人であるからなのか少し冷めた感じで、しかし保護者としては的確な心配を呟く。

「帰りたい」

思わず言ってしまった。

その素直な言葉に、姫咲が俺をチラリと睨んできた。

お前だって、一瞬「ゲッ！」て顔したじゃないか！

と思っても口にはしない。

「せっかくのお祭りで、なんて気分を害する事しか言えないのかしら？この口は」

そう言って姫咲は俺の頬をギュウツとつねる。

「ど……ごめんなひゃい……」

痛みを堪えて涙目になりながら謝る。

「分かればよろしい」

パツと放され、解放されてもなお痛む俺の可愛いほったを自分でよしする。

なんて暴力的な女なんだ。せっかくの浴衣も、これじゃあ台無しだ。

俺はしばらく、頬をさすりながら姫咲の事を恨めしげに見ていたが、俺の視線に気付いた姫咲が振り返る瞬間に目を逸らした。

もしここで、目が合ったりしたら第二の攻撃がきたに違いない。

「で、どうするの？」

姫咲が社を見て質問する。

社の「はぐれそう」という言葉が気になったのだろう。

「はぐれない」ようにはどうする？という意味の質問だ。

「うーん、そうなあ……。希、お前、携帯、持ってきてるか？」

「え？ ああ、持ってるけど？」

今ドキの高校生で、出掛けに携帯を持っていけない人はいないと思う。

その今ドキの高校生に俺も加わるわけだが……。俺が持ってきていないと思ったのだろうか。

いや、単なる確認作業かもしれない。

「よし、じゃあ、別行動しよう。俺ら2人と希と桂の2人。桂の事、任せたゾ☆」

パチッ

とウィンクを俺にして、姫咲が何か反論しようと口を開く前に、たったか彼女の手を掴んで人ごみの中に入って行った。

なんか、こうやって別行動するのにやたら慣れているように感じるのは……

奴がそれだけ年を取ってるってことだろうか？

「……きもっちワル」

ボソツとした呟きに振り返ると、桂が眉間にこれ以上は無理だろ、ていうぐらい皺を寄せ渋い顔をつくっていた。

社の、最後のウィンクにとどめを刺されたんだろう。

うん。その気持ち、痛いほど分かるよ、桂。

「立派な大人が、“ゾ”はないよな、“ゾ”は」

あえてウィンクには触れず、同意を示す。

「ええ、ホントに」

渋面のまま、社と姫咲が消えていった人混みを見つめて桂が相槌を打つ。

しばらくそのまま人混みを見つめる。

ザワザワザワザワ

太陽も沈みきった街の通りに、露店の明かりは煌々と、しかし揺れるように妖しく存在している。

それは蛾にとっての誘蛾灯みたいなものだろうか。

人々がふらふらと吸い込まれている。

楽しそうに笑う浴衣を着た女性、はしゃぐ小さな子供。
手を繋ぐカップル、かき氷を手にする女の子……。

少し離れた所から見るお祭りというのは、ちょっとした異空間のようを感じる。

「ふう……」

異空間を見る俺の横で静かに桂が息を吐いた。

眉間の皺はなくなっていた。

「行こうか、桂」

努めて柔らかく笑う。

桂も柔らかく笑って、

「ええ」

と応えた。

人ごみの中に自らの足を踏み入れる。

はぐれるかもしれないからと言って、姫咲と社のように手を繋いだりしない。

俺と桂は幼馴染みで、友達で……

手を取り合って歩くような関係じゃないことは、俺自身がしっかり自覚している。

手なんか、握れない。

第16話：夏祭り

賑わう人の中に入ってしまうと、さっきまで異空間だった風景は、俺の現実として存在した。

時折すれ違う人とぶつかったり、露店のおじさんに声を掛けられる事で、自分もこの空間に存在しているのだと実感する。

「桂、大丈夫？」

ぶつかる人が絶えない状況で、浴衣で歩くというのはどうにもスムーズにできない。

特に、普段から着慣れない者にとってはそうだろう。

桂も俺も、そんな一人だ。

「うん、今のところは……希は？」

「ん、大丈夫だよ」

人より背の低い俺は、昔から人混みに飲まれやすかった。

だからだろうか、桂も俺を気遣ってくれる。

「でもとりあえず、せっかくだから何か食べたくない？」

「そうね、せっかくだし……何、食べたい？」

「かき氷は？祭の定番」

「うん。じゃあそれで」

俺達はかき氷屋の前で止まり、それぞれに好きな味を買った。

俺はレモンで、桂はイチゴ。ちなみに1個300円。高い。

「お祭りで買った物っておいしいし、どれもキラキラしている気がするけど、やっぱり高いよね」

黄色いシロップがかかったかき氷を食べながらボソツと言う。

感想と言うより愚痴に近い。

それを聞いた桂が小さく笑った。

「ふふ……」

笑って、シャリッ…とかき氷を自分の口に運ぶ。

たったそれだけの動作にドキツとする。

浴衣に祭り、という組み合わせが俺を翻弄するのだろうか、あるいは男は皆、翻弄されてしまうのだろうか。

ドキドキドキ……

心臓の音と焦りを感じ取られまいと、冷静なフリでかき氷を食べる。

「確かに、高いわね。

でもそれだけ、特別って感じがするわ。

特別だからキラキラしているし、特別だから、高くても買っちゃう。そうじゃない？」

特別。

そうかもしれない。だから、こんなにドキドキする。

「……そうかも。うん、特別だ」

「でしょう？」

桂が微笑む。極上の微笑み。

頭と心がグラリとなる。

グラグラグラグラ。

揺れて、揺れて、抱き締めたい衝動に駆られる。

特別な夜、特別な空間、特別な君。

触れたい。

君の手に、頬に、全てに……触れたい。

グラグラグラグラ。

この揺れが、「葛藤」ってやつだろうか。

なんだか目眩に近い。

「希？」

「……うん？」

呼ばれて、葛藤から覚める。

「そんなふうにはブーツとしてたら、はぐれるよ？」

いつの間にか俺は立ち止まっていたらしく、少し先にいる桂に注意される。

俺と桂の間を、人が行き来している。

確かに、はぐれそうだ。

「あは。ごめん」

素直に謝り、これ以上離れない為に桂の元へ駆け寄る。

「何か、考え事？」

「えっ？ いや……何でもないよ」

考え事でもしていたのかと訊ねられ、ドキッとする。

考え事……まあ、ある意味その通りなのだけど、あんな下心ばっ

かの心の内なんて本人に言えるわけもなく。

後ろめたさいっぱいで誤魔化す。

俺の動揺ぶりは隠し切れていなかっただろうが、桂は追及しなかった。

「そう」

と一言だけでその話は終わる。

桂は深く追及すると言う事をしない。深入りする事をしないのだ。だからだろうか、俺も桂に対して深い所まで入り込もうとしない。する必要はないと思うからだ。

言葉で聞かないと分からないような事なら、最初から話すのが彼女だ。

伝える必要はないと思う事はわざわざ口にしない。

だけど……だからこそ、桂の心は遠い。

俺はもちろん、姫咲だってそう感じる事があるんじゃないだろうか。

もしかしたら姫咲は、その心の距離が不安なのかもしれない。

“双子” っていうのはきつと特殊な関係だ。

ただの兄弟や姉妹と違って、より自分に近い人間同士なんじゃないだろうか。

自分と同じと思いつつ、違う事を知る彼女は、違うから不安なのかもしれない。

自分と違う事が、同じでない事が不安なのかもしれない。

自分が思っているように、願っているように、桂も自分を好きでいてくれるのか、実際には分からないから……それが、不安なのかもしれない。

そうだとしたら、それは姫咲の身勝手なワガママというものだろう。

でも……その気持ちは、分からないでもない。

「ねえ、希」

「うん？」

名前を呼ばれて桂の方を見るが、桂は俺を見ていなかった。

どこを見ているのか分からない遠い目を、俺達がやって来た方とは反対に向けている。

その先は行き止まりになっていて、左手に神社に上がる階段がある。

その神社はあまり繁盛してなくて、ガランとした小さなものだ

つたと記憶している。

「ごめんね」

ボソツと呟くようにして言った謝罪の言葉。

「え？」

意味が分からなくて聞き返す。

何に対しての謝罪か、分からない。

俺が分からない事に気付いたのか、桂がくすりと笑って自分の足元に視線を落とし、それから俺を見た。

「希、気を遣ってるでしょ？」

「……」

半分ハズレ。

だけど半分は当てられていて、俺は黙ってしまふ。

気を遣ったつもりはない。

でも、そう感じさせている事は何となく分かった。

だって……今日の桂はいつも以上に、存在が危うい気がしたんだ。

そのまま消えていきそうな予感。

そんなもの、当たるとは思っていない。

でも……今日の桂は、新月のように静かで、不安になる。

いつもなら社に食って掛かる桂。

今日は……ただ、避けていた。

なぜ？

そう思ったから、俺はいつもより遠慮していたんだ。

それは無意識だったけど。

「ごめんね、希。いつもいつも、希には救われてる」

「桂……」

小さく微笑んで、また遠くを見る。

何だろう。……怖い。

「希は心労が絶えないね。特に、私というと気を遣ってばかりで……」

「そんなことない」

桂の言葉に、今度は強く否定する。

それはない。

それだけは有り得ない。

桂、それは俺が君の事を負担に思っていると、そう言っているんだらう？

でもそれは違う。

負担なんかじゃない。決してない。

俺は好きで、桂といるんだ。

負担なわけがない。

「そんなことない。俺は、疲れていない。むしろそれは、桂の方じゃないの？」

「……」

俺の指摘が正しかったのか、今度は桂が黙る。

「桂。君はいつも人の事ばかりだ。俺、前にも言ったよね？」

「……」

桂は黙ったまま、遠くを見たまま、何も言わない。

「君は……」

言いかけた時、

ピリリリ… ピリリリ…

携帯が鳴った。

俺のだ。

画面を見ると、社からの電話だった。

無視しようと懷に戻す。

が……

ピリリリ… ピリリリ…

執拗にそれは鳴り続ける。

仕方なく、俺は電話を取った。

「もしもし」

幾分か、不機嫌な声で電話に出る。

当然だろう。

こっちは大事な話の最中だったって言うのに……。

『あっ！希か！？姫咲、一緒にいるか！？』

電話の向こうから聞こえた社の声はいつになく慌てていて、何かあった事を感じさせた。

「姫咲？いないけど……何で？」

姫咲は社と一緒にいるはずではなかったか？

なのに今、社は俺の携帯に慌てて電話を入れている。

もしかして、2人ははぐれてしまったのだろうか。

俺の口から姫咲の名前が出た事に気付いた桂はハッと俺を見る。
何かを察知したのかもしれない。

『いや……姫咲が綿菓子ねだったから買いに行つて……その時ちよつと離れたんだけど、その間にどっか行っちゃまったんだよ』

慌てながらもそこは大人。

社は事情を丁寧に説明してくれた。

「姫咲の携帯は？」

とりあえず、俺にかけるよりそっちが先だろうと思い、訊ねる。

俺の横で桂が汗を掻いている。

『俺が持つてるから通じねえ、意味ねえ』

しっかりとした声で返事をしているが、社はそうとうに汗を掻い

ているに違いない。

聞くには、姫咲は携帯を巾着に入れていたらしく、それをレディファストよろしく社が持ってやっていたらしい。

言われてみれば、手を繋ぐ2人のうち社だけが何かをぶら下げていたような気がする。

今回ばかりは、姫咲の女王様な性格が仇となったようだ。

「そう。分かった。俺達も探してみるよ」

『ああ、頼む』

そう言っで電話が切れる。

「姫咲……？」

携帯を仕舞う俺を見て、桂が呟くように訊ねてきた。

その声は掠れていて、顔も心なしに血の気が引いているようだ。

双子の勘というのは鋭い。

彼女は訊ねながらも、既に姫咲に何かあった事を感じ取っているのは誰が見ても明白だった。

「うん。兄ちゃんとはぐれたって……桂！」

俺が最後まで行ってしまふより先に、桂は走り出していた。

これじゃあ、俺達まではぐれたようなもんじゃないか。

そう思いながら、彼女を追いつける。

しかし、これだけの人混みの中を追いつくのは困難で。

結局、桂の姿を完全に見失ってしまった。

「くそっ」

舌打ちする。

露店が立ち並ぶ通りの長さはおよそ200～300mほど。

所々、横に逸れるように更に狭い路地にも露店は並んでいて、
実際問題、はぐれた人を探すのは困難な状況と言えるだろう。

何で姫咲ははぐれたのだろう。

根本的な疑問が浮かぶ。

正直、姫咲が自分から社と離れていったとは思えにくい。

だからこそ、社もあんなに慌てているんだろう。

そのはぐれた理由が、人混みに飲まれ、はぐれてしまったという
わけでなかったら……

不安は募る。

汗が出る。暑さのせいだけじゃない。

だからこそ、桂も慌てて走り出したのだ。

不安しか、感じない。

姫咲とは連絡が取れない。

桂とも取る事ができない。

唯一、つながるのは俺達兄弟の携帯。

焦る。

路地の方に入り込んでいたら……？

悪い事ばかり想像する。

こういう時、人っていうのはなぜネガティブ思考になるんだろう。

路地の方も少し覗きながら、祭りの端の方へと歩いていく。

「いない……」

とうとう、端まで来てしまった。

姫咲はもちろん、桂とも、社ともすれ違わなかった。

「ほぼ一直線なのに……」

一直線の通りで、こうも出会わないもんだろうか。

それにしても姫咲だ。

いったい、どこへ行ったのか……？

もし、もしもだ。

単に人混みに流されただけだとしたら、彼女は今どこにいるだろう？

考える。

無理矢理ネガティブ思考を碎いて考える。

そうして思い出した事が一つ。

「……神社？」

この通りの突き当たり、左手に階段を構えている、もうずっと前から寂れている神社。

小さい頃。

それこそ桂がまだ社に素直な好意を抱いていた時代だから、うんと昔だ。

そんな頃、今日みたいに姫咲が迷子になった事があった。

俺達は必死で探した。

と言っても、俺はその事の重大さが分かっていなかったし、兄ちゃんに引っ張られるようにして歩いていただけと言う方が正しいのだけど。

ともかく、探していた。

当時の姫咲は一人で勝手に行動するやつで……今も大差はないが、とにかくすぐにはぐれる子供だった。

そのくせ、一人っきりと気付くと寂しがって、俺達が自分を探しに来るのをじっと蹲って待つようなやつだった。

可愛いんだかそうでないんだか……。

しかもその蹲ってる場所っていうのが大抵、ちょっと高い所だったりして、

それがこの時はその寂れた神社の境内で……。

そこにいるかもしれないと先に考えたのは桂だったのか社だったのかは知らない。

だが確かに、その時姫咲は桂ではなく社の方にしがみついたと言う事は覚えている。

それまで姫咲は桂が全てだったのに。

そうだ。

あの時のあの出来事から、何かが変わってしまったのではないだ

ろうか。

今思い出してみると、そんな気がして、心がザワついた。

そんな事を考えている場合ではないと言うのに。

姫咲を、探さないといけないのに……。

いや、もしかしたら、3人はそこにいるかもしれない。

姫咲は昔を思いだして。

桂は姫咲の事を思って。

社は姫咲の習性を考えて。

だとしたら、行く価値がある。

……“行く価値がある”……？

違う。行かなきゃいけない、そんな気がするから行くんだ。

俺は寂れた小さな神社へ向かって歩き出した。

第17話：迷子の真相

階段を登り切るとそこには小さな境内が……誰もいない境内があった。

「何だ……」

拍子抜けする。

もしかして、と意気込んでいた分、このガランとした境内に力が抜けた。

俺の考えは間違ってたのか……

そう思いながら境内を見渡す。

正面に小さな本殿が、登ってすぐの左右には申し訳程度の狛犬が一匹ずつ置かれている。

周囲は木で囲まれていて、まるで森の中にあるかのような雰囲気だ。

祭りのザワつきや明かりもここまでは届かないらしく、静かで暗い。

唯一の明かりと思えるのは本殿近くの灯籠ぐらいで、だがその割には明るいかもしれない。

何となく、その灯籠に近付く。

意外に明るい灯籠に興味を引かれたからだ。

すると、本殿の裏から話し声が聞こえた。

……ような気がする。

なぜか忍び足で本殿の裏を覗き見る。

そこには……

「あんたがついていながら何で……」

「ああ、本当、情けないよ」

桂と、社の姿があった。

ザッと目を凝らすと、近くに姫咲の姿は見当たらない。

そこにいるのはどうやら2人だけらしい。

暗くて顔を見る事が出来ないが声で分かる。

桂が憤慨している。

社は自分の非を認めていた。

この空気に、なぜか俺は2人の前に出て行きにくくて、本殿の陰に隠れて聞き耳を立てた。

あまり、気分のいい事じゃないと分かっているながら。

「情けないで済む話じゃないでしょう!？」

「分かってる」

静かに、だが確かに桂は怒っている口調で社を責める。

社はそれを全て受け止める。

それはまるで“大人の余裕” ったのを見せているようで、いちいち桂の癪に障っているようだった。

それを分かっていて社はそんな話し方をしているのだろうか。

桂は、何だかんだ言ってもまだ高校生だ。

だからか、それ以上に社を責める言葉が見つからず、強く社の事を睨んだ。

社を睨んだ所で何かが進展するわけじゃないと彼女も分かっているのだろう。

睨む事しかできない自分が歯痒くて悔しくて奥歯を噛む。

噛んで、やはりただ強く睨み続ける。

「そんなに睨むなよ。目、悪くするぞ」

しばらく2人して沈黙していたが、社がそれを破った。

だがそのセリフがさらに桂の怒りを煽ったようだ。

当然の事だろう。

今まで話していた事をはぐらかすような言い方を彼はしたのだから。

「……関係ないでしょう？」

「自分の目が悪くなっても社には関係ない」という事なのか、
「今話している事とは関係ない」という事なのかよく分からない。

もしかしたらその両方を含めた言葉だったかもしれない。

「……そうか」

桂の今にも噛み付きそうな言い方に対して、社は静かにそして穏やかに話す。

また、沈黙。

桂の態度に社が怯むとは思わない。

そうだ、怯んだとしたなら、あんなに穏やかに話せるわけないのだから。

ふと昔の記憶が甦る。

俺達が幼稚園で社がよく世話してくれていた頃。

俺や姫咲は結構な問題児で……

と言っても、俺は姫咲に振り回されてただけなのけど……

そんな俺達2人だったから社の苦労も絶えなかった事だろう。

しょっちゅう2人して叱られていた覚えがある。

それに対して、桂はやっぱり大人しくて、手が掛からないイイ子だと皆に褒められていた。

心ない大人からは皮肉も込められていて、彼女はそれに傷付いていない、気付いていないフリをしていたのだと、今は思う。

そんな桂に対し、社はとても優しく接していたようだった。

桂に調子を合わせるように、ゆったりとした雰囲気を持ち、穏やかに、そう、今のうちに穏やかに話していた。

それはある意味、社にとって桂は特別だったという事なのだろうか。

そしてまた、社も他の大人のように差別していたという事でもあるかもしれない。

桂は気付いていたのだろうか。

今も、気付いているのだろうか……？

社がこんなふう to 穏やかな雰囲気飾るのは、もしかしたら意図したものかもしれないと……。

「桂」

「……」

やはり沈黙を先に破ったのは社。

桂は応えない。

睨む力を弱め、平静を装っている。

しかし、桂の平静さは次の社の一言で脆くも崩れた。

「もう、姫咲に固執するのはやめにしないか？」

「！」

カツ…と目を見開き、眉間に皺を寄せる。

奥歯を噛み締め、社の言葉に静かに耐える。

心ない、社の一言。

桂はきつと、俺が思う以上に傷付いたに違いない。

兄ちゃん。

何でそんな事を桂に言えるの？

どうして……？

つくづく、社は姫咲本位だ。

そりゃそうだ。

彼にとって、姫咲は全てなのだろうから。

「……固執……？」

静かに、しかし喉の奥から絞り出すようにして桂が言葉を紡ぐ。

声に、力は感じられない。

変わりに怒りを、俺は感じた。

「私が、姫咲に、固執してる……？」

ゆっくりと言い、そして自嘲するような笑みを見せた。

ゾクリと悪寒が走ったのを感じる。

暗闇で、俺は物陰に潜んでいるわけだから、彼女の顔がはっきりと見えるわけじゃない。

……その、声にゾクリときたのだ。

声だけでもそうなのに、目の前でそれを見た社は、どんな気分だろうか。

「あ、……ああ」

頷く社の声は上擦っている。

顔は蒼白で、口許が引きつっている。

自業自得だ。

だとしても、まさか桂がこうなるとは想像していなかっただろう。

怒らせるような事を言った。

社にその自覚はあるに違いない。いくら何でも大人なのだから、それくらい分かっているだろう。

しかも今回ののは絶対に、ワザとだ。

怒りに任せてでもいいから桂の言葉を聞きたいと、そう思ったのじゃないだろうか？

穏やかに話すだけでは、過去の経験上で本音を曝す人間じゃないと知っているだろうから。

しかし、まさか怒った桂がこうなろうとは……予想していなかっただろう。

俺だって、驚いているのだから。

「何を、どこを見て、私が固執していると……?」

桂の声は冷たい。

夏だというのに、暑さが消し飛ぶほどに冷たく感じる。

だがそれでも、社は怯まず桂と会話をしようと一つ深呼吸をし、目を瞑り、開いて彼女を見据えた。

「俺を、嫌うのが何よりの証拠だろう？」

「！」

いきなり核心を突かれ、また桂は目を見開いた。

そして今度は先程と違い、小さく、淡く、笑んだ。

それでも自嘲気味に。

「……そうね。確かに、固執しているのかもしれない」

桂は認めた。

大きく息を吐く。

足元に視線を落とし、それから社の顔を見ることなく、クスリと笑って話し出す。

「双子だからか……私と姫咲の絆は強かった。それこそ、永遠に2人きりであっても構わないと思っていたほどに」

彼女の心の内を聞くのは初めてだった。

……それを、俺ではなく、社に話しているのだと思うと無性に腹が立ち、嫉妬の念に駆られたが、そんな状況ではないと自分に言い聞かせる。

「でも違った。実際に、姫咲はあなたに奪られて……消失感が強くて、私から大切な者を奪ったあなたが憎かった。でも、ダメね、そんな気持ちでいたら姫咲に嫌われちゃう。だから……今日でやめにする。それで、いいでしょう？」

「え……？」

やっと本音を話してくれたと思った矢先、あつと言う間に桂は結論を出し、社はそのあまりの即決差に間抜けな声を出した。

俺だって、キョトンとなる。

「もう、あなたを嫌う態度は取らないようにするし、姫咲とも距離を置くという事。それが、あなたの望みでしょう？ 違う？」

「いや……違わないけど。……いいのか？」

「いいも何も、私自身きっかけが掴めなかったただけだし、調度いいわ」

晴れ晴れとした様子で桂は微笑む。

社はポカンと口を開いて呆気を取られている。

なんとも情けない格好だ。

「……それで」

桂の声が急に凜とした響きに変わった。

思わずギクリと首を竦める。

「いつまで隠れているつもりなの？」

凜とした声音のまま誰かに向かって訊ねる。

ヤバイ。バレてた……？

そう思っても出ていけないでいると、俺が隠れていた所とは反対側から誰かが姿を現した。

「やっぱり、姫咲」

「姫咲!？」

えっ!?! 姫咲!？

桂だけは気付いていたらしく、

「困った子ね」という表情で姫咲を見る。

姫咲はバツが悪そうに舌を出して笑った。

「えへ。バレてた？」

「当然でしょ。それに、はぐれたのも意図的にでしょ」

「あは。さくすが桂。お見通しね♪」

どうやら今回の騒動は、もともと姫咲が仕組んだ事らしい。

一体どの辺りからそうと気付いていたのか知らないが、姫咲の魂胆まで彼女にはお見通しだったようだ。

その魂胆とはまさに、先程の桂と社の会話の事で、姫咲なりに2人に仲良くなつてほしいという願いからの事だったらしい。

きっと桂にはそんな姫咲の気持ちまで分かっていたのだろう。

だからこそその即決だった、という所か。

「それじゃ、やっと姫咲も姿を現した事だし、邪魔者は退散するわ」
明るい声で半分呆れたように言うと、桂は姫咲が隠れていた方から階段へ向かった。

俺は慌てて追い掛けた。

また見失うなんて事はしたくなかったから。

でも、それだけが理由じゃない。

何かが俺の中で不具合を感じさせたからだ。

……何が？

妙に晴れ晴れと微笑んだ事が？

明るい声だったのが？

何が、こんなに気になるのだろうか？

何が……

こんなに俺の不安を掻き立てているのだろうか？

「桂！」

階段を数段降りた所で呼び止める。

驚いたのか、弾かれたように俺を振り返り、しかし俺の姿を見た途端にホッとするように笑んだ。

「希……」

呼ぶ声に力はなく、今にも倒れこみそうな不安に襲われた。

すぐに階段を降り、桂の傍に寄る。

「いたのね」

少し恥ずかしそうに俯きながら、桂は言う。力なく。

「うん、ごめん……聞いてた」

「うん……」

さっきまでの桂は力いっぱい虚勢を張っていたのだと、今の桂を見て思う。

痛々しい……。

そうだ、傷付いてないわけがない。

「ごめんね、希。いつも心配掛けちゃって」

また、そんなふうになを氣遣う。

いいのに。

たまには氣を抜いても、いいのに。

なぜ彼女は、こういうふうになにしか人に接する事ができないのだろう？

「桂」

「はい」

返事する声が、弱い。

目を、合わせない。俯いたままだ。

不安になる。

このまま、桂が消えてしまうのではと、不安になる。

桂……。

「家に、帰ろうか」

だけど、その不安を無視して、できる限り柔らかい声で提案した。

桂は、たぶん今日はもう、姫咲と社が2人でいる所を見たくはないだろう。

「……うん」

答えが声は、小さいままだったけど、桂は顔を上げて、小さく笑った。

だから、俺の提案は間違いではなかったのだとホッとす。
残る階段を並んで降り、祭りの明かりの方へと足を踏み出した。

その時。

「あ！希！もしかしてあんたも神社にいたの！？」

階段の上から呼び止められた。

振り返ると、当然それは姫咲で、その横にはしっかり社もいる。

こっち来んの早過ぎだろ。

そんな文句が頭に浮かぶ。

何でもこうもタイミングが悪いんだろう。

せつかく、桂も持ち直したというのに……。

隣の桂を見ると、そこにはただ、真っ白な肌をした女の子がいた。

一瞬ゾクツとするほど彼女の肌は白くて、白過ぎて……

その目は姫咲を見上げているようにも、何も見ていないようにも見えた。

ああ、今、桂は傷を抉られた。

「……いたよ。てか、2人のんびりしてけば？俺達、先に帰っとくし。行こう、桂」

これ以上、桂のこんな表情を見ていたくなくて、乱暴に言い捨てると、俺は桂の手を取ってさっさと2人から遠ざかった。

そのまま小走りで祭りの中を抜ける。

時々、人とぶつかったりもしたけど、その足を緩めることなく、ひたすら真っ直ぐ露店が並ぶ通りを抜けた。

抜けた後も、しばらくは桂の手をつかんだまま小走りで家の方へと向かった。

だって……手が、離せなかった。

桂の手は冷たかった。

夏だというのに、ひんやりしていて。

俺がその手を掴んで祭りを抜ける間にも暖まる事はなく……

「希」

そう呼ばれて立ち止まるまで、彼女の手は冷たいままだった。

「……ごめん。走らせちゃった」

でもその手の冷たさに気付かないフリで笑う。

「ううん。いいの。いいの……」

そう言って首を横に振る。

目を伏せ、何かに耐えるように眉間に皺を寄せ。

小さく、そっと息を吐いた。

いくら街灯しかともっていない暗闇の中と言っても、これだけ傍にいれば表情ぐらい分かる。

手を離すのが躊躇われた。

手を離したら、彼女のこの手の冷たさだ、もしかしたらそのまま、霧のように消えてしまうかもしれないと不安を抱く。

でも、人間が消えるなんて有り得ない。

だから、そっとその手を離した。

「のど、渴かない？ 走って来ちゃったし、せっかくのお祭りなのにあんまり買えなかったし」

あえて明るく、桂の表情に気付いていないフリで訊ねる。

「すぐ近くに公園あるし、自販機でいいならお詫びに奢るよ」

と、数メートル先にある公園の入り口の横に立っている自販機を指す。

桂は一瞬呆けた顔をしたが、すぐに小さく微笑んで、

「じゃあ、お言葉に甘えてご馳走してもらおうかな」

と応えてくれた。

「ん。何がいい？」

「そうね、紅茶……ストレートがいいな。あれば。なかったら普通のお茶で」

「了解」

注文を受けて自販機に向かった。

桂は先に、公園に行っていると言って、入り口から入っていった。

……ごめんね、桂。もしかしたら君に、無理をさせてしまったね。

辛い表情を見たくなくて俺が今誘ったって事、人の気持ちを推し量る事が美味しい君にはきつとバレているよね。

だから、笑ってくれたんだよね。

ごめんね。

謝っても仕方ないって事は分かってる。

でも謝る事しかできないのも事実。

だからごめん。

第18話..欠けた月

自販機で買った缶ジュースを手に、俺と桂は公園のベンチに座っている。

桂はストレートティーで、俺はコーラ。

浴衣でベンチに座り、缶ジュースを飲んでるって光景は、どうもミスマッチだ。

「缶ジュースなんて、久しぶり」

ぽそつと小さく桂が呟いた。

「え?」

別に聞き取れなかったわけではなく、単に意味が分からなくて思わず聞き返した。

意味なんて、言葉通りに決まってるのだろうけど。

「缶ジュース、最近飲まないと思って。」

普段は寮にお茶か冷水器があるだけだし、校内の自販機はパックなもの。

缶ジュース自体をあまり見ないから、久しぶりだなと思って」

微笑んで、俺の疑問を完璧に解決してくれる。

これが桂じゃなくて姫咲だったら、「最近って缶ジュース買わな

いのよねえ」で終わるだろう。

何の解決にもなりやしない。

「そっか。……そうだね。俺も、最近はコンビニでペットボトルがほとんどだ」

「うん。缶ジュースって、もうなくなるのかもしれないわね」

「うん……」

缶ジュースの話題でしんみりとなる。

たかだか缶ジュースの事なのに。

こんなふうになるのは、やっぱり先程の傷が、まだ乾く気配すら見せていない証拠だろうか。

コクッ……

と桂の喉が鳴る。

コクッ… コクッ…

と何口分かをいっきに飲む。

横から見る桂の喉の動きが妙に艶っぽくて体温が上がる。

心臓が高鳴る。

不謹慎……

と自分を叱咤しても上がった体温は下がらない。

弱った女性というのは、何と色っぽいのだろう。

弱った女性というのに、どうして男は弱いのだろう。

ある種の自然の摂理だろうか？ だとしたら尚更、抗えない。

だけど抗わなければ。

ゴクゴクッ……

と勢いよく炭酸の効いたコーラを飲む。

せめて冷たい物を飲む事で、心を落ち着ける。

今は、色っぽい気分に浸っている場合ではない、と。

「お祭り」

ポツリと桂が呟いた。

目は、自分の膝の上に置いた両手の中の缶ジュースを見ている。

「戻っていいよ？ 希」

「……」

手の中のジュースを見つめる桂を俺は凝視する。

なぜ、そんな事を言うのか。

「……できないよ」

一言、そう言うのがやっとだった。

彼女の心の内は読めない。

いや、読めないのは彼女だけじゃなく、姫咲だって社だって両親だって……その心の内は読めないのだけど。

そうではなく、そんな単純明快なものではなく……。

目に見えない分厚い壁で自分を守り固めているような、そう、どこかで必ず人をシャットアウトする為の鍵が彼女自身についているのだ。

その鍵はきつと……暗号式のもの。

彼女にしか分からない、キーワード。

「何で？ 私はいいのに。帰ってきたばかりで疲れてるし……希は、お祭り楽しんできて？ ね？」

そう言って桂は小さく笑った。

儚く、儚く……今にも消えそうな不安定なその笑顔。

なぜ君は、そうやって微笑むのか。

「一人で祭りに行っても楽しくないよ」

「……」

思わず強い口調で答えてしまった。

桂が驚いたような表情で、俺を見る。

目が合う。

「姫咲と兄ちゃんと一緒に、なんてバカな事、言わないよね？」

「……！」

桂の目が見開く。

傷を抉った。

分かってる。分かってて、わざと言った。

抉ってあげるよ、桂。

君はもう、充分……理解しているはずだろうから。

それとも、俺がこんな事言うとは思ってなかった？

……そうだね。

俺も、自分で驚いている。

「桂だって、2人一緒のトコにいたくないくせに」

「……」

桂は黙っている。

目を伏せ、再び缶ジュースを見つめる格好になる。

俺は桂から目を逸らし、真正面を見つめた。

誰もいない公園。

所々に外灯があり、その誰もいない公園を闇の中に浮き出している。

「……」

「……」

しばらく沈黙が続いた。

桂に気付かれないように、小さく息を吐いた。

空を見上げる。

夏の夜空は、やけに近く感じるものだ。

近く感じるせいか、作り物に見えるその星の中、静かにしかし決

して存在感は薄くない月を見付けた。

今日の月は少し円が欠けていて、そしてとても白かった。

遠い所から、俺を見ている。

その白さと、小ささと、遠さに……俺は泣きそうになった。

だって、今そこに浮かんでいる月は、まるで桂に見えたから。

だから凄く哀しくて、寂しくて、泣きそうになった。

沈黙が続く。

先程の神社での事を思い出す。

社と桂の初めての対立。

姫咲と社が付き合いだした時も、結婚が決まった時も、桂は何も言わなかった。

まして社と向き合って話す事なんて、これまで一度たりともなかったと記憶している。

だから、社が桂に対しては遠慮がちだった事を初めて知った。

いや、思い返せば普段から、桂の扱いは腫れ物を触るように慎重だった気がしないでもない。

なぜ？

疑問がわく。

また、桂の初めて曝した本音もよく分からない。

本当に、あれだけが彼女の心を痛めていたものだろうか？

何かもっと、肝心の部分が抜けてはいまいか？

そもそも……なぜ桂は社を嫌う必要があるのか。

もちろん、最愛の妹を早い段階で奪われてしまったのは理由にあるだろう。

それに間違いはないはずだ。

しかし、社に対してああいう態度を取りだしたのは、随分昔の事だった気がする。

小さい頃、それこそ桂と姫咲が幼稚園を上がるまでは、確かに桂は社に懐いていた。

姫咲の全ては桂だった。

そうだ、あの時、姫咲が神社で蹲って待っていた時、あそこから姫咲の世界が変わった。

彼女の世界に、社も加わった。

その事で桂の世界も変わったのではないか。

あれは、いつの事だ？

朧気な記憶を辿る。

いつだ？

あれは……そうだ、2人が小2の頃。

俺は小1で、社は高2。

あの日から、桂の様子が変わったのではないか。

ふとそんな事を考える。

当時小1の俺に、確かな記憶なんてない。

当時の事を思い出して、はつきりと頭に浮かんだのは……

桂の、表情。

驚愕に目を見開き、呆然と姫咲と社の2人を見ていた、あの表情。

思い出して、ゾツとした。

夏なのに、ぶるっと身体が震えた。

桂には気付かれなかった。

再び考えに耽る。

確かに、あの時から少しずつ、桂は社から……俺達から離れていった気がする。

徐々に遠ざかり、存在するかしないかの境目に立って、輪の外からフェンス越しに俺達を見ているように……。

社をしかめっ面で見なくなったのは、その形が当然になった頃。

そうだ、姫咲が社を想って泣いた、小4の終わり頃、社が大学進学を決めた頃だ。

姫咲を泣かせた社が嫌いになったのだとその時は思った。

でも今は、何かが引っかかる。

果たして理由はそれだけか？

疑問がぐるぐる回る。

社への疑問、桂への疑問。

ぐるぐるぐるぐる回って、混ざり合って……一つの結論が不意に頭に浮かんだ。

その結論はあまりに唐突で、「まさか」と疑う。

でもそれは、充分は理由ではないのか……？

更に深く考え込みかけた時、桂が沈黙を破った。

どれだけの時間が経っていたのだろう。

月が少しだけ上方に移動していた。

「ごめんね、希」

沈黙を破った言葉は、今日何度目になるのだろうか、謝罪の言葉。

なぜ、謝るのだろうか。

謝るべきは、分かっている君の傷を抉った、意地悪な俺の方ではないか。

見ていた空から、桂に目を移す。

桂は缶ジュースを見つめたままだった。

「私は希に、いつも心配ばかりかけてる。……情けないね」

そう言って、小さく笑った。

吐息を漏らすだけの笑みは儚く、危うい感じがした。

「心配なんて……」

してないと言ったら嘘になる。

でも、俺が心配するのは桂の事が好きだから。

勝手に君を好きになって、勝手に心配してるだけ。

君がそれを気に病む必要なんて、これっぽっちもない。

「してるでしょう？」

微笑んで俺を見る。

目が合う。

ドキリとする。

闇の中の君の姿、君の瞳。

なんと妖しく輝いているのか。

魅せられて、ドキドキと心臓が鳴る。

早鐘のように、という表現はこれを言うのか。

桂、君はやっぱり、月だ。

人を無自覚に魅せさせて、知らん顔で妖しく闇に輝く。

遠い存在のくせに、無性に恋しくなる存在。

桂、君はやっぱり、月だ。

月だ。

「ごめんね。ずっと、ずっと前から気付いていたのに……希があまりに優しいから、今まで甘えてしまった。ごめんね」

辛そうに笑って顔を伏せる。

痛い。

「分かったのにね。自分が甘えてしまってる事、さり気なく守られてた事」

桂が静かに話す。

こうやって彼女が思っている事を話してくれるのは初めてで、俺はただ黙って聞く事しかできない。

「TOYOSHIMAで姫咲達と会った後も、今も、私は希に助けられちゃったね」

遠くを眺めて、小さく息を吐く。

「情けない」

強い口調で自分を卑下する。

その桂の言葉が、胸に痛い。

「弱くて、嫌になる」

痛い。

「こんな自分が、嫌いで堪らない」

桂の声が震えた。

顔が歪み、悔しそうに、で泣きそうにも見えるその表情。

彼女が泣く所を、俺は見た事がない。

「嫌いなんで、言うもんじゃないよ」

ポトリと、ありきたりな台詞を言ってしまった。

口を挟む気なんかなかったのに、あまりにも桂が辛そうで、それを見ているのが耐えられなくて、そんなありきたりなセリフを吐いてしまった。

後悔に、口の中が苦くなる感じがした。

罵られる事を覚悟した。

それなのに……

「そうね。私も、そう思う」

同意の言葉。

桂はどこまでも人に優しい。

人を、傷付ける事をしない。

自分はたくさんたくさん傷付いて、傷だらけになって血を流しているというのに。

そんな彼女を強いと思ったのは中一の時。

「だけどやっぱり、好きになれないの」

「何で？」

思わず理由を問う。

桂はしばらく俯いて、ポトリと答えた。

「何でかな」

答えではない答え。

それは本気で出した答え？

違うよね。

本当は、もっとちゃんと、理由があるよね？

俺に知られまいと、誤魔化したに過ぎない、そうだろう？

だって俺は、気付いたから。

気付いてしまったから。

君の心の内を。

そう、君はただ臆病で、だからこそ人を傷付けたくなくて、人に自分の傷を見られるのが嫌で……。

綺麗に笑う君が俺は好きだけど、その裏側に、誰にも見せないように隠し続けている傷があるよね。

その傷の隠し方は、まさに月。

月は地球に対してずっと真正面を向けている。

背中にはたくさんのクレーター。

それを見る事ができるのは、宇宙に行って月の後ろに行った者だけ。

だって月は、地球という輪っかの外から、俺達を見つめているから。

だから、輪っかの外、更にフェンスも越えて、そして後ろに回らない限り背中の傷を見る事はできない。

月は、巧みに背中を隠して地球の周りを回っているから。

桂の傷も、同じように彼女の背後に回るか、あるいは彼女が背を向けない限り見る事はできない。

しかし決して、彼女が自ら背中を見せてくれる事はない。

それが桂だから。

自分の傷は自分だけが背負えばいい。

そう考える桂はなんと優しく、強いのだろう。

そう思ったのは中一の時。

桂の傷は、恐らく俺が考える以上に深く生々しい。

それを俺に見せないのは俺への優しさ。

姫咲への優しさ。

きっとこの優しさは本当で、嘘偽りはない。

だけど、傷を見せない事で自分は傷付いていないフリをして、
そんなフリで俺や姫咲を誤魔化して、

俺達を傷付けまいという行動を取る事で自身を守っている。

その姿は、優しさと、強さと言えるか？

自分の傷を他に見せない事は、彼女にとって自身を傷付けまいとする
防御壁になっているのではないか。

そうするしか自身を守る事ができないと考える桂を、
愚かで弱いと考えるようになったのは、今、さっき。

俺は気付いた。

気付いてしまった。

いや、本当は知っていた。

桂がどれほど弱く、どれほど傷付きやすい人か。

なのになぜ、今まで強いなんて、優しいなんて思っていたんだらう。

その優しさは、その強さは、全て全て、彼女の弱さと傷付きやすさからきていたと言うのに。

自惚れていたんだ。

桂の事を好きであるが為に、彼女の事を理解したつもりでいて、自惚れていた。

俺の方こそ、愚かじゃないか。

自分に激情し、叱咤する。

だけど、今は自分の愚かさを嘆いている場合じゃない。

「何でかな」って、自分で理由、分かんないの？」

努めて冷静に訊ねる。

俺の渦巻く内情は、今は必要ない。

「うん……そうね、よく、分からない」

ゆっくりと桂は答えた。

嘘つき。

……嘘つき？

いや、これも彼女なりの優しさ。

そして、彼女が発する微々たるSOSにも思えた。

初めて心の内を話す桂。

それはさっきの、神社で社に話してたのとは別で、断ち切るようなそんな大雑把なものじゃない。

大雑把なものだったら、今こうやって話してはいないはずだ。

だって桂は、俺が社を嫌う理由が姫咲との事にあると知っている事を、気付いているはずだから。

でももう、それだけが理由ではない事を俺は気付いてる。

桂、君はそれにも、気付いているのだろうか。

SOSに感じるその優しさに、今日俺は、初めて深い所まで入り込むよ？

その覚悟は、きつともう、できてるね？

さっき君の傷を抉ったから、きつと、覚悟はできてるよね？

神社の階段での事もある。

俺が気付いてないわけじゃない事、君には分かっている事だろう。

「嘘ばかり。本当は、よく分かってるんじゃない？」

意地悪な言い方をする。

ワザとだ。

今度は、桂は驚いたりはしなかった。

代わりに、小さく微笑んだ。

その顔が、安心した顔のように見えたのは、たぶん俺の気のせいじゃない。

「分かってるって？何で？何を？」

桂の臆病者。

自分の口ではなく、俺の口に言わせるつもりか。

心の中で思わず笑う。

案外、酷いやツじゃないか。

やっぱり姫咲と血が繋がってるだけはある。

妙な所に感心し、納得した。

人間っぽい所が出てきた桂に、不謹慎にも高揚した。

恋の病も末期かもしれない。

なんて、バカな事を考える。

「桂が自分を嫌う理由。姫咲と社が関係してる事」

俺が言ってもいいけど、やっぱりそこは本人が言うべき事だろう。

だから、箇条書き程度の事しか言わない。

桂は眉間に皺を寄せた。

心の中で、俺が意地悪な奴だという事を認識したのだろう。

俺だって、自分がこんな意地悪になるなんて思ってなかった。

お互い様だよ、桂。

「関係してる……でしょうね」

桂は俺に言わせる事を諦めたのか、一つ息を吐くと、真顔になって、何もない正面を見据えて言った。

「そうね、関係してる。だから、嫌なの。
忘れてしまいたいのに、忘れられない。

2人がいようといまいと、記憶だけで、苛々するの。

2人が付き合いだした時、結婚が決まった時……思い出すと未だに、苛々するわ」

静かに、感情のない声で桂は話す。

嘘つき。

まだ、そんな事言って、俺を誤魔化す気での？

「嘘つき」

無意識に口をついて出た言葉。

桂が驚いたように俺を見た。

ああ、そうか。

やっぱり桂は、最初から心を曝し出すフリをして、巧妙に本心を隠すつもりだったのか。

そう思って、自分が情けなくなる。

桂、君にとって俺は、そんなに頼りにならない男ですか？

「嘘つきだよ、桂。“苛々する”？違うだろ？“傷付く”の間違いだ」

目を見開いたまま、桂は何も言わない。

言えないのか。

「2人がいよいよといまいと、君は記憶だけで傷つく。そうだろう？」

「……」

返事はない。

俺は続ける。

「傷付いて傷付いて、それを悟られないようにずっと俺達に内面を見せず、近くにいるのに遠く隔てた所に桂はいる。桂の心はそこにある」

そう、それはやっぱり、

「桂は月みたいだ」

月だ。

月そのものだ。

「いつも……何度も、そう思ってた」

昔から、小さい頃から。

姫咲が太陽なら、桂は月だと。

「月は美しく輝いてるけど、その後ろは傷だらけだ。桂、君はまさに月だよ。」

表面では笑って、裏ではその傷で泣いている。
俺のこの分析が、
違っているとは言わせない」

桂は無言で俺を見つめる。

目を逸らす余裕がないのだろう。

「傷を見せまいとする君の姿は強いと思う。だけどその反面、弱さの証拠でもあるよね」

桂から目を離す。

痛々しくて、見ていられなかったというのもある。

でもそれ以上に、俺が彼女を見続ける事で、彼女が焦げてなくなってしまうような気がしたから、目を離した。

バカげた理由だと分かっている。

だけどそう思わざるを得ないほど、桂という女の子は危ういのだ。

「傷を見せまいと離れる事で、傷付かなくていい距離を作った。違う？」

「……」

やっぱり、返事はない。

「桂が作った距離は、そのまま君を守る壁として、今もある。……」

いや、今、俺が壊したかな」

言ってから、思わず笑った。

でも桂は真顔。

血の気がない。

心なしか、身体が震えている気がする。

“気がする”？

違う。

震えてる。

俺は今、確かにその壁をぶち壊し、彼女を大いに傷付けている。

だからって、途中で止めるつもりはない。

君はもう、その壁をなくすべきなのだから。

覚悟はしてただろう？

俺が君の傷を抉ったあの一言を聞いた時に。

それに、何度も言いかけては止めてきた事を、君はとうの昔に氣付いているはずだ。

氣付いてないわけ、ないだろう。

「壁を作ってた。その事實は、君が臆病な証拠だ、桂」

ギュッ…

と自分の手の中の缶ジュースを桂が握りしめる。

傷に、耐える。

顔は真っ白で、目を強く瞑り、身体を震わせ。

痛い。

ごめんね、桂。

「桂は、甘えベタだから、こうなったんだろうね」

痛みを堪える桂を見つめて言う。

「姫咲は違う。あいつは人に頼るから…：すぐに頼るから、負の感情に押し潰されないんだと思う。」

傷付く度に、俺に頼り、桂に頼り、兄ちゃんに頼り…：まったく、柔軟な奴だよ」

桂の震えは止まっていた。

目を開き、俺を見る。

だから俺は微笑んだ。

「その点、桂は頑固」

そう言って笑うと、桂は不思議なものを見るように目を瞬かせた。
パチパチと瞬きを繰り返す。

「桂は頑固だよ。決して人に頼ろうとしない。それはやっぱり、強い
って事かな。

だって、強くなければ、今の今まで一人で立ってるなんてできない」
やっぱり、目をパチパチさせるだけで桂は何も言わない。

「でも、もう限界だよね」

瞬きが止まった。

「一人で抱え込むの、疲れたでしょう？それに気付いたのは俺だけ
だよ。だからさ、桂」

そこで一旦、言葉を切る。

息を吐いて、吸って、真顔で言った。

「俺を頼らない？」

「え……？」

驚きのせいで出た桂の声は、
俺の傷付ける言葉でどれだけ口の中を乾燥させてしまったのか分かるぐらい掠れていた。

だから、桂の声じゃない気がして思わず息を洩らして笑った。

桂が、バツの悪そうに少しだけ顔を顰める。

「ねえ、俺を頼ってくれないかな？」

まるでプロポーズみたいだけど、たぶん桂はそう感じてはいないだろう。

だって俺は、告白すらしていない。

「でも……」

普段の声で、桂が躊躇う声を出す。

「それとも、俺じゃ頼りにならない？」

「……」

桂が無言になる。

そうか、桂にとって俺は、頼りないか。

そう思った時、その思いに気付いたのか、桂が慌てて返事してきた。

「いや、その、頼りにならないわけじゃなくて……」

しろどもどろ。

冷静で穏やかな雰囲気じゃない桂なんて初めてだ。

「そうじゃなくて……違うの。でも、やっぱり頼れない……」

困ったような顔で言った桂の目は、俺を捉えてはいなかった。

また、誤魔化しているのだろうか。

いや違う、これは……

「せっかく壊したのに」

壊したのに……

「また、壁を作るの？」

自分でも驚くほど冷たい声だった。

だから当然、桂は固まった。

顔が強張っている。

桂は表情豊かな方じゃない。

方じゃないのに……今日の俺は、桂にこんな表情ばかりさせてる。

最悪だ。

そう思っても、一度決壊した理性は元には戻ってくれない。

負の感情が押し寄せる。

吐き出し口を求めて俺の口に溜まってくる。

桂、桂。

好きなのに、傷付けたくないのに……

それでも俺は言ってしまった。

「俺じゃ、そんなに頼りにならない？」

止まらない、負の感情。

俺を男としてみてくれないのか、桂。

そんなの、なんて、ヒドイ……！

バカな俺。

そんな負の感情は一時的なものなのに。

それなのに、溢れていく。

「そうだね。俺は、君より年下で、ガキだ。いや、それだけじゃない」

一時の感情が、桂を傷付ける。

止まらない。

「そう、もともと傷付いてる理由は、本当は」

桂がハッと目を見開く。

「やめて！」

そう叫んだ。

それと同時に俺は言ってしまった。

「社が好きだからだよね」

酷く傷付いた桂の顔。

それを見て、やっと我に返った。

ああ、なんて事を言ってしまったのか。

だけでもう、後戻りはできない。

“社”

この名を避けて通ろうとしていたのに。

でも元々、避けて通れるものじゃなかった。

だって、この“社”こそが、桂をここまで頑なにし、そして傷付けているものの、根っこなのだから。

そうだ、これを抜きに解決しようとした所で、やっぱり桂の心の内は社に捕らわれ続けていたに違いない。

桂を傷付けたくはなかった。

だけど、もう傷付けてしまった。

激しく、大いに、傷付けてしまった。

だからもう、俺はイイ子ぶらない。

嫌われていい。

桂を解放したい。

……やっぱり、エゴだろうか。

「やっぱり、桂は兄ちゃんが好きだったんだね」

「……」

桂は傷付いたまま、微動だにしない。

やっぱり、そうだったのか。

さっき、沈黙の間にぐるぐる考えた結論こそが、これだ。

たぶん、社も気付いていたんじゃないだろうか。

だから、神社でわざとあんな言い方をしたんじゃないだろうか。

意地の悪い兄弟だ、と冷たく思う。

「小さい頃、俺が記憶している程度だからあまりアテにならないかもしれないけど、確かに桂が好意を持っていたのを覚えているよ」

正確に言えば、最近思い出した。

桂はただ無言。

「よく懷いてたよね。まあ、俺も姫咲も懷いてたけど」

無言。

痛い。

傷付けてるのは俺なのに、痛い。

「懷いてた理由は、何かな？それまで分かんない」

分かる気がするけど、それはやっぱり分かんない。

たぶんその辺の記憶が、すっぱり抜けてるんだ。

小さい頃に見ていた社はただ優しく、あたたかだった記憶しかない。

あまりに曖昧すぎるだろう。

「でも確かに、好きだったよね。でもいつからか、少し変わった」

それまで微動だにしなかった桂が、ピクツと肩を震わせた。

どうやら、自覚はあるらしい。

「たぶん、2人が小2の頃。姫咲の迷子がきっかけ」

今度は動かない。

「あの時、姫咲と同じで桂も、その世界が変わったんじゃない？」

「……」

動かない、答えない。

俺は続けた。

「そして小4。姫咲の自覚。完全なる、姫咲の変化。小6の姫咲の桂に対するコンプレックス。中2の、姫咲の告白、社の答え」

つらつらと、桂が傷付けられていただろう出来事を述べていく。

「高2の春、2人の結婚」

「やめて」

桂の制止の言葉が入った。

でもやめない。

やめた所で何の意味もない事は、彼女自身がよく分かっている事だろう。

「正直に言えばね、俺はその辺、一体どの辺りから桂が今みたいになっちゃったのか分かんないんだよね。理由も」

「……」

再び桂は無言になる。

「でも、桂は姫咲の事も社の事も好きだったわけだから、きっと苦しかっただろうと思う。

もし、社の事を好きでなかったら、一人の男として好きでなかったら、苦しまずに済んだだろうにね」

桂が強く、固く目を瞑っている。

「でも実際は好きだったわけで……いや、今も好きなんだよね。だから、社を嫌うフリもしている。

姫咲との結婚を、幸せを、素直に喜ぶ事もできないし、素直に憎む事もできないから。

……ああ、いい子ちゃんぶってるんだ」

「やめてっ!!」

桂が悲痛な叫びで訴えてきた。

俺はヒドイコトを言った。

自覚してる。

だから嫌ってくれていい。

罵ってくれていい。

「やめて……お願い、希……」

力なくそう言って、桂は前傾姿勢になって、涙を流した。

俺は彼女を傷付けた。

一番大切に、傷付けたくないと思う彼女を、桂を、傷付けた。

心が痛い。

痛める資格なんてないクセに。

桂の喉から小さな嗚咽が漏れる。

「お願い……それ以上、言わないで……」

小さな嗚咽すらも堪えて、必死に懇願する。

そうだ。

彼女がきつと、いや絶対、一番分かっている事なんだ。

でも、今さらそんな事に気付いても、もう遅い。

もう、傷付けてしまったのだから。

だから俺を罵って。

……いや、ダメだ。

罵られる事で俺は救われようとしている。

だからって許されるのも有り得ないし、何より自分が許せない。

大切な彼女をめいっぱい傷付けておいて、自分が救われようなんて。

なんて、なんて傲慢なんだ……！

「醜いよね」

だから俺は更に傷付ける。

“桂に嫌われる”これが俺への罰だ。

だから、もうこれ以上、社と姫咲の事で傷付いても平気なぐらい、めっちゃくちゃに傷付ける。

これが俺の、君への愛だ。

ごめん、俺のエゴだから、お前にそう思ってもらおうなんて、これっぽっちも思っていないよ。

「本当は、社と結婚したかったんだよね？桂。

でもそれが叶わなかった。

本来なら、社じゃなくて姫咲を憎む所だよね。

でも、いい子の桂にそれはできない。

だから、社を嫌うフリをしてるんだ？」

俺の勝手な妄想。

だから凶星かどうかなんて関係ない。

とにかく、彼女を傷付ける。

それだけ。

「醜いね」

これはトドメ。

「ねえ、桂。醜いね。このままじゃもつと醜くなるよ。醜いだけだよ」

桂への、俺への、トドメ。

「どうせ醜いなら、曝しちゃったがマシじゃない？」

何傷付くの怖がってんの？

何罵られんの恐れてんの？

傷付けよ。

罵られろよ。

それぐらい覚悟決めろよ。

いい子ちゃんぶってんじゃねえ。

“嫌われたくない”とか思ってたんなら正真正銘のバカない子ちゃ

んじゃねえか」

わざと乱暴に言う。

「嫌われろよ。社に、姫咲に、“好きだ”と“憎い”と言って嫌われろ。

それぐらいの事、お前は今までやってんだぞ。いい子ぶって、その方が気分悪いんだよ」

乱暴な言葉でトドメを刺す。

今、俺は激しく彼女を傷付けた。

これ以上は傷付きようがないだろう？

だから、恐れるな。

2人に、社にぶつかってこい！

そんな気持ちを乱暴に、傷付くように言う。

気付くだろうか。

いや、気付かなくていい。

ただ、俺の言葉で奮起してくれる事を祈る。

「すっげえ気分悪いっ」

吐き捨てて、俺は彼女を置いて、公園を出た。

泣きそうになって、

だけどここで俺が泣くのはお門違いもいい所だから。

齒を食いしぼり、空を仰ぐ。

そこには月があつて、白くて、欠けてて……

その欠けてる感じが、今さっき傷付けてきた桂の心みたいで。

余計に泣きそうになって、自分の顔を自分の右拳でおもいつきり殴った。

これじゃたぶん、桂の痛みの十分の一も感じていないだろう。

ごめん、桂。

本当は君を守りたかった。

でもやっぱり、俺は小さくて、ガキで。

君を守るほど強くない。

君を傷付ける事しかできない、愚かな男だった。

だから桂、

俺の事は、忘れて。

第19話..その後

お盆休みが明けるまでの間、俺は桂と顔を合わせる事はなかった。

いや、桂だけじゃない。

姫咲にも社にも会ってない。

別に、桂と話したあの夜が原因というわけじゃない。

最初から、この夏が始まる前から決まっていた事。

それを知っていたのは両親と祖父母だけだったけど。

俺は8月14日の早朝に、渡米したのだ。

いきなりじゃない。

ずっと前から考えてた事。

高校を中退しての、ホームステイ留学。

反対はされなかった。

空港には松永と清田が見送りに来てくれた。

2人とも眠たそうにしてて、思わず笑った。

両親にはホームステイ先の住所を教えたけれど、兄ちゃん達には

絶対に教えるなと口を酸っぱくして忠告しまくった。

だからか、渡米してそのまま住み着いて10年になる今でも、社や姫咲から連絡が来る事はない。

もちろん、桂からも。

桂は、俺が願ったように俺の事を忘れただろうか。

姫咲と社にぶつかっていっただろうか。

それを知る手段は、俺にはない。

『ヘイ！ノゾミ！』

呼ばれて振り向くと、マサヤが飛行機の窓の外を指さした。

何事かと思って窓の外を見る。

『あれがフジサンかい？』

マサヤが訊ねる。

確かに、そこには日本の象徴、富士山の姿。

『そうだよ』

答えて、ああそうか、と思う。

そうか、10年ぶりに、日本に帰ってくるんだ……と。

マサヤは日本とアメリカのハーフで、フルネームをマサヤ・ケントという。

『へえ。聞いてた通り、美しい山ね』

そう感想を洩らしたのは、後ろの座席に座っているクリスティーナ・ウオン。

クリスティーナはチャイニーズ系だ。それっぽい黒髪が色っぽいと評判のナイスバディ。

『そんな言うほど美しくもないだろ』

批判するのはクリスティーナの横に座る、ガリース・ヤマサキ。

彼は日系で、“ガイ”と呼ばれている。

『ガ〜イ〜。また気分悪い事言ってる』

そのガイを批判するのはミューズ。

本名はマリーア・ヤマサキ。

ガイの奥さんで、“ミューズ”という呼称は、彼女の声が美しいから。

俺は今、この4人とバンドを組んでいる。

きっかけは単純。

留学したばかりの時に

『OH! ヤマトナデシコ〜!』

と飛びついてナンパしてきたガイに、思わずパンチを食らわしてしまった事だ。

俺だけやたらと幼く見えるが、それでも皆、同じ歳。

学校でのその出来事は一瞬にして知れ渡り、それを聞きつけた残る3人に気に入られてしまったのだ。

なんと言っても、ガイの見た目は厳しくて、誰もが彼に怯えてしまふほど顔も身体もごつかったのだから。

そんな彼にパンチをお見舞いした、一見か弱そうな少女。

実際は男だと分かった時の反応は、さすがアメリカ人といった感じに大袈裟なものだった。

で、そのままバンドの練習場に連行。

『ちようどキーボードが欲しかった』と言って強制的にバンドに入れられ、練習……

全米デビューを果たし、今や日本にまで名を轟かす有名ロックバンドの一員。

人生って分からないもんだ。

そう、なぜなら今、俺はそのバンドメンバーの一員として、日本の音楽番組に出演する為に飛行機に乗って日本にやって来ているの

だから。

飛行機を降り、荷物を受け取り外へ出ると、そこには日本の報道陣や警備員、ファンと思われる私服の男女が群がっていた。

一瞬気後れしたが、昔、日本にいた頃テレビで見ていた光景を思い出し、すぐに持ち直した。

『日本語って雑音に聞こえるな』

にこにこ笑ってファンに手を振りながらガイが言う。

雑音って……お前も日本の血、混ざってるだろ。

そう思っても口にはしない。

言うど、いろいろ面倒な奴で……アメリカ男版姫咲、といった感じか。

『それはあんたが日本語分かんないからでしょ』

同じくニコやかに手を振りながらミューズが言う。

俺の役目だったものを彼女がやっている事が、最初は妙な感じがしていたけれど、今となってはそれが日常。

『あ、あの子可愛い』

今度はマサヤが発言。

『どれ？』

クリスティーが訊く。

2人とも、可愛い子に目がない。

……アメリカ版、松永&清田……？

いや、そこまで2人は激しくなかったって。

『ほら、あれ』

とマサヤが顎で指す。

その方を俺もつい見てしまった。

『あら、ホント。カワイイ〜♪』

クリスティーの満足そうな声。

俺は嫌な予感がした。

この事態を避ける意味も含めて、日本の両親にはバンドをやっている事も、今日帰国する事も伝えていなかったのに。

日本のマスメディアを甘く見過ぎた。

なんて、今更の後悔。

時すでに遅し。

奴はついに、俺を発見した。

「希!!」

その声は「見付けた♪」というのではなく、「やっと見付けたぜこの野郎」て感じの声。

マサヤとクリスティーが驚くのも仕方がないほどの、外見とのギャップ。

般若の如き怒りの形相。

懐かしい。

なんてこれっぽっちも思う余裕のないその怒り。

「姫咲……」

そう、姫咲だ。

会えば絶対に怒られる。

分かっていたから、何も伝えずに帰国したのに。

俺を発見した姫咲は、一緒にいた社を置いて、人混みをかき分けこちらに向かってくる。

本来はこのまま流れて出口まで行く所だが……

そんな事したら、姫咲の怒りを煽るだけに決まってる。

だから俺は、黙って姫咲の到着を待った。

「これ以上は立ち入り禁止です！」

姫咲が俺の目の前まで来ようとした時、一人の警備員が止めに入
った。

過激なファンだとも思われたのだろう。

それが分かった姫咲は怒りの形相のまま、その警備員を睨んだ。

「はぁ！？私は関係者よ！！！」

いや、お前は関係者じゃなく、ただの身内だ。

まあでも、彼女にとって肩書きなどどうでもいい事だろう。

「警備さん、その人は身内だから、大丈夫ですよ」

とりあえず、姫咲がこちらに来るのに邪魔になる警備員にそう声
を掛ける。

警備員は困ったように他の警備員を見たが、俺はそれを無視して、
姫咲にファンとの境界であるテープをくぐらせた。

その瞬間、ファンからブーイングの嵐。

予想していた事だ。だから気にしない。

「希……っ」

何かを堪えるように、小さく絞り出した声で俺を呼ぶ。

怒られるのも、殴られるのも、承知の上だ。

「あんたって奴は……っ」

いつそう強く、俺を睨む。

殴られる。

そう思って歯を食いしばった。

しかし次に飛んできたのは拳でも平手でもなく、

「バカァッ……」

と言った、姫咲の泣き顔。

予想外の事に、俺は呆けてしまう。

周囲はザワツとなる。

「姫咲」

「バカァッ」

ドンッ

と胸を叩かれ、そのまま胸に泣きついてきた。

「希のバカッ！いきなりいなくなって、連絡もなしで……何やってんのよ、ばか……っ」

ドンッ

とまた胸を叩かれる。

「ごめん」

姫咲がこうやって泣くのは、社か桂の事だけだと思ってた。

ああ、確かに俺はバカだ。

姫咲は寂しがり屋で、独占欲が強くて、その上欲ばりだっていう事、忘れてた。

「ごめん」

もう一度謝る。

10年という年月は、思ったよりも長かった。

10年前、あの時桂を傷付けた頃、俺は2人の身長よりも低かった。

それが今、姫咲の頭が俺の顎の下になるまでに、俺の背は伸びていた。

桂はきつと、もう少し下に来る。

「私に謝るなっ！」

ドンッ！ と今度は突き放す。

俺より下にある目が睨んだ。

「謝るべきは、桂よ!!！」

「……」

姫咲の言葉に、俺は何も言えない。

「私にはやあちゃんがいた。でも、桂は一人だった……一人だったのよ!？」

姫咲はそこで言葉を止め、ぐっと何かに耐えた。

もしかしたら、姫咲は俺があの日にと分かった事を、随分前から知っていたのかもしれない。

「希の薄情者っ！」

薄情者と言われても……

当時の俺には、ああするしかなかった。

「裏切り者！」

いや、それは何か違うねえ？

「根性無し！！」

根性……

いや、ないけどさ。

なんか、論点ズレてないか？

そうは思っても反論できる立場じゃない。

だから黙って姫咲の言葉を聞いていた。

するとずっと後方から社が制止に入った。

「姫咲。もうそれくらいにしとけ」

姫咲はそちらを振り返った。

「希だって、充分承知しているよ。それに……」

一旦言葉を句切って俺を見る。

社の目は、こんなに強かっただろうか。

思わず、身が竦んだ。

「怒ったり文句を言うのは、お前の役目じゃない」

社の言葉に、忘れかけてた痛みが甦る。

ズキッ…

痛い。

桂……。

君を傷付けて、俺も傷付いた。

あまりのタイミングの良さに、君は俺が逃げたと思っただろうね。

そうだ。

実際俺は、逃げたんだ。

両親以外に連絡は取らず、日本に戻ることなくアメリカに住み着いて。

君から、この痛みから逃げた。

弱いと言った俺が、君よりも弱かった。

それは事実。

「希」

社に呼ばれる。

「分かっているよな？」

その質問に、俺は頷くのが精一杯だった。

「姫咲、帰ろう」

社の呼び掛けに、姫咲が社の元へと戻っていく。

「あ、そうそう、コレ、俺と姫咲の子。今年で3つになる女の子。もう2人上に男の子がいるよ。

お前の甥っ子と姪っ子だ。

名前知りたいなら、家に帰っておいで」

そう言って社は小さな女の子を抱えて見せ、笑って姫咲と一緒に去っていった。

日本を離れて10年。

2人に子供ができてても、おかしくはない年月が過ぎた事を痛感した。

俺はまだ、逃げるつもりだろうか。

第20話：歌番組

『ねえ、ノゾミ』

番組本番、集中できていない俺に、クリスティーが声を掛けてきた。

この番組は日本人なら誰もが知っているだろう生放送の歌番組。

例に漏れず、俺達洋楽バンドはそのトリを担う為、アーティスト陣が並ぶ後方に座している。

マイクも入らないのでよくアーティスト同士が司会者の後ろで会話をしていたりするが、まさにそんな感じでクリスティーが話し掛けてきたのだ。

『何?』

『昨日からあなた、少し変じゃない?』

『そう?』

“変”と言われて自覚があったから、とぼけてみせる。

“昨日から”とはつまり空港での姫咲と社との一件の事。

『あー。あのシュラバナ』

クリスティーとの会話に反応したガイが、おもしろそうに笑った。

あの雰囲気は彼には修羅場に見えたらしい。

彼の中では、俺が姫咲を置いて行って、そのスキに社が彼女をかっさらって子供を見せつけた。

という解釈がなされているのかもしれない。

全くの勘違いだ。

『シュラバじゃないよ』

『え！？あれシュラバじゃなかったの！？』

ガイの言葉を訂正すると、今度はマサヤが驚きの声を上げた。

『違うって』

呆れ声で訂正する。

そんなにあれは、修羅場に見えたのだろうか？

『えー。じゃあ何であんな雰囲気だったの？それでどうしてノゾミは落ち込んでるの？』

ミューズが訊ねる。

どうやら全員、俺が修羅場って、だから落ち込んでいると見ていたらしい。

全然違う。

『あれは修羅場じゃないよ。強いて言うならケンカ。ちなみに俺は落ち込んでない』

そう、俺は落ち込んでいない。

ただ考え事をする時間が増えただけだ。

……それを、落ち込んでいると言うならその通りなのだろうけど。

『ふん。そう』

俺の回答はどうやらつまらなかったらしい。

4人は興味が失せたのか、別の話題に切り替えた。

彼らは子供のように好奇心旺盛で、且つ冷めやすい。

だからこそ、人気が出たのかもしれない。

あっけらかんとした性格の彼らと共にいる事はとても心地良い。

……これも、“逃げ”なのだろうか？

日本人アーティストの曲が終わり、番組独自の軽快な音楽が流れた。

どうやらCMに入っただけらしい。

「アーティストのルナさん、到着しましたあー！」

CMに入ってからすぐに、番組ディレクターがそう叫んだ。

そう言えば打ち合わせの時、渋滞に巻き込まれて1人の女性アーティストが遅れてくる事を聞いた気がする。

そのアーティストが番組の終盤で、なんとか間に合ったらしい。

曲順で言えば、そのアーティストは俺達の前に歌う事になっている。

調度、次が彼女の出番だ。

「すみません！遅くなりましたー！！」

とにかくギリギリだったから、メイクもそこそこの感覚で、慌ててその彼女がスタジオに入ってくる。

スタッフに、司会者にペコペコ頭を下げ、深呼吸をして用意された席に着こうとした時。

俺と目が合った。

『あら、この子』

『シュラバの子』

修羅場じゃないと言ったのに、まだそんな事を言う。

でも仕方ない。

確かに姫咲と同じ顔。

『髪切ったの？もったいない』

昨日の姫咲と違って短い、顎までのサラサラヘア！。

俺の身体が凍った気がした。

だけど口だけは滑らかで……

「桂」

彼女の名を呼んだ。

もう何年も口にしなかった名前。

久しぶりに口にして、その愛おしさに胸が苦しくなる。

それと同時に、

ズキッ…

と心が痛んだ。

「希……」

彼女が俺を呼ぶ。

幻じゃない。本当に、桂だ。

桂が、アーティスト？

思いもしなかった現実。

だけどそれに気を取られる余裕はなく、ただただ、昔の傷が痛む。

桂の顔が歪んだ。

怒っているようにも、哀しんでいるようにも見えるその顔で、俺に近付き、

パンッ！

と平手を食らわせた。

突然のこの出来事に、スタジオが静まり返る。

痛い。

でもこの痛みはきつと、あの時彼女が受けた何十分の一。

ゆっくりと、桂を見る。

「CMあけますっ！」

スタッフの声。

桂は昨日の姫咲とは比べ物にならないほど強く俺を睨み、無言で

席に着いた。

CMあけの、軽快な音楽。

シン…ッ

と静まり返ったままのスタジオの雰囲気を、どうにかこうにか司会者を取り繕う。

桂は何事もなかったように晴れやかな笑顔で受け答えをしている。

「今回の新曲は、実はデビュー前にできあがっていたそうですね」

「はい。高校生の頃に書いたものです」

「高校生！それにしてはやけに大人びた歌詞だよねえ」

「そうですね。当時の私、マセてましたから」

なんて会話を一通り終えたとスタンバイ。

誰もさっきの一幕を口にしない。

そりゃそうだ。

テレビで放映されたわけじゃないのだから、今ここでそんな話をするのはおかしい。

でも俺は、平手の余韻があって、桂と司会者の会話は全く頭に入っていないかった。

だから、桂が歌い出してもその声は俺には届きはしなかった。

桂の曲が終わり、再びCM。

こちらに戻ってきた桂は俺を見て、今度は平手を出さず、ただ一言

「バカ」

と言って座った。

CMの間に席を入れ替え、前列に座る。

更にその間に、桂の事を考えていた。

桂の平手の意味、「バカ」の意味。

そしてあの強い瞳。

俺が日本にいない間に桂は強くなった。

いや、もともと持っていた強さが増した……？

分からない。

でも確かに、強くなった。

アーティストをやるぐらいだ。

表現豊かになっている気がする。

平手打ちは、俺への抗議だろう。

どの、俺に対して？

君を傷つけた俺にか、

傷付けるだけ傷付けて去った俺にか、

逃げた俺にか弱い俺にか。

……すべて、だろうか。

全てかもしれない。

“かもしれない”？

いや、絶対にそうだ。

俺の行動その全てが君を傷付けたはずだから。

あの頃の痛々しい君しか知らない俺。

君の傷は、癒えただろうか。

誰か、俺でもない社でもない誰かに、癒されたのだろうか。

できることなら、君のその傷を癒したかった。

もう、手遅れかな、桂。

CMがあける軽快な音楽が流れる。

「さあ、続いてはアメリカよりお越し頂きました“ The Thr ob”の皆さんです！」

司会者の紹介に、わっとスタジオが盛り上がる。

「今夜歌っていただく曲は、月をテーマにした曲なんですよね」

曲の内容について訊かれる。

俺は通訳代わりもしてるから、他のメンバーに英語で伝える。

そして英語を日本語へ………というのを幾度か繰り返し、スタンバイとなった。

今日演奏する曲のテーマは“月”。

俺が作詞した。

月。

つまり、桂を想って。

女々しいと自分でも思う。

クリスティーにも言われた。

でも、ガイとマサヤとミューズは気に入ってくれた。

この愚かさは、誰にでもあるものらしい。

ガイの作る曲に乗せ、俺の想いはミューズの声で飛んでいく。

♪過ぎた日々は戻らない

君をたくさん傷付けた

その背中

ボクはそこにキスをする

闇に輝く君は

妖しくて危うくて：

手をのばす

決して届きはしないのに 手をのばす

過ぎた日々は戻らない

捕らえる事のできない君

小さな笑顔

ボクは月に恋をする

白く輝く君は

儚くて美しくて：

守りたい

一人占めしたくなるほどに

傍にいたい

過ぎた日々は戻らない
守るどころか傷付けた

その背中

ボクはそこにキスをする

過ぎた日々は戻らない

どうかボクを嫌いになっ
て

それでもボクは

輝く月に恋をする ♪

俺の想いは、ミューズの声で飛んでいく。

女々しく、愚かな俺の想い。

今更だけど、君に届いただろうか。

いや、届くはずがない。

これは全て英語で、歌ったのはミューズ。

演奏が終わる。

ロックバンドのくせにこの曲はバラード。

だから、拍手はあってもどこかしんみりとした空気が漂った。

妙に恥ずかしくなって、照れ隠しにメンバー皆で無理矢理はしゃいだ。

はしゃいで、やっと俺は前向きになれた。

ミューズに歌ってもらっても、それは俺の言葉じゃない。

俺が、この口で伝えなければ伝わらない。

桂、ごめんね。

俺は女々しくて愚かで……

そして諦めが悪いらしいよ。

そう、この曲でも言った。

“それでも俺は、君に恋する”

桂。

俺は、桂が好きだ。

第21話：月に恋する

番組を終え、スタジオを出ようとする桂を呼び止めた。

今を逃すと、もう彼女とは会えない気がしたから。

「桂！」

振り向く。

その表情は、なぜか泣きそうに歪んでいる。

クリスティー達に先に戻っていてくれと伝え、彼女の傍へ駆け寄った。

先程の平手打ちがまだ記憶に新しい周囲は、何事かとざわついた。

また桂の平手が飛ぶと思ったのだろうか。

いや、飛んでもおかしくない事を俺はしている。

もう一度、叩かれても仕方ない。

その覚悟もして、彼女を呼び止めたのだから。

でも、今度はただ俺を見上げるだけだった。

心なしか、その瞳が潤んでいる気がする。

「桂……」

「……」

名前を呼んでも、返事はない。

ただ、俺を見つめている。

「ごめん」

「なぜ、謝るの？」

堪えるように眉間に皺を寄せ、俺に問う。

「謝る必要はない」という意味の問でない事は俺が一番分かっている。

謝る理由を、俺に自覚させる為の問い。

そうだよね？

そんなの、充分すぎるほど理解しているけど、それでもきつと彼女には足りない。

「君をたくさん傷付けた」

「……」

桂は無言で、続きを目で促す。

「たくさん傷付けたくせに、君を弱いと詰ったくせに、その俺が弱くて逃げ出した」

一つそこで息を吐く。

そして自嘲するように微笑んだ。

「愚かだよね」

「バカ」

間髪入れず、桂が罵る。

「希のバカ。バカ、バカ、バカ」

堪えるように眉間に皺を寄せ、“バカ”を繰り返す。

「バカ」

「ごめん」

「謝ればいいってものじゃないでしょう？」

「うん、ごめん」

「また、謝る」

「うん。じゃあ、何て言えばいい？」

「……そんなの、私は知らない」

「そうだね」

胸が苦しくなる。

桂とのバカみたいなやり取りに、胸が苦しくなる。

こんなやり取り初めてで、苦しくなる。

だから笑った。

桂は怒るように眉間に皺を寄せた。

「桂」

「はい」

今度は返事してくれた。

「俺ね、昔も今も、桂が好きだ」

「……」

でもまた、桂が黙る。

「さっきの俺達の曲。そのまま、俺の桂への気持ち」

桂は黙って俺の話を聞いている。

「ごめんね。たくさん、たくさん君を傷付けた。
本当は誰よりも守りたかったのに。」

桂がとても傷付きやすく、あの時とても傷付いていた事分かっていながら……
分かっていたからこそ、君を傷付けた」

10年前のあの日の事を思い出す。

そう、俺はわざと、彼女を傷付けた。

「もう、君が傷つく所は見えていられなくて……
だからこれ以上ないくらい傷付けた。

今俺は謝ったけど、俺には謝る資格さえ、本来はないって事、分かっている。

でも、君が好きだという気持ちに嘘はない」

告白する、10年越しの想い。

「好きです」なんて単純なものではない、この重たい告白を彼女はどう受けているだろうか。

「知っていたわ」

ポツツと桂が呟いた。

「知ってた。希が傷付きながら、私を傷付けた事。だからこうして、私は今ここにいるんだもの」

桂が微笑む。

10年ぶりの愛しい君の笑顔。

身体中が熱くなった。

「本当はね、自分でも分かった。私のあの醜い感情。自分でも直視できなくて、ずっと奥に仕舞い込んでた。

でもそれを希に見付けられてしまつて、直視するしかなかった時、その醜さが消えたの。

素直に、やっと自分と向き合う事ができて、

社兄ちゃんにも話す事ができて、

とてもスッキリした。

でもね、そこでまた気付いたの」

そこで言葉を切ると、桂の表情は笑顔から泣きそうな顔へと変化した。

「希がいなくて辛い事」

ポトリ。

と落とすように桂は言った。

「確かに私は、社兄ちゃんの事が好きだった。

それもそのはず、唯一ちゃんと私と話してくれた大きな人は、彼が初めてだったんだから。

今思えば、あの恋は幼い。

姫咲への嫉妬も、バカげてる。

嫉妬するほど大人の恋じゃなかったんだもの」

自嘲するように笑う。

胸が痛む気がした。

「そう考えてみて、よくよく思い出してみるとね、少なくとも私が本音を出してたのって、希だけだったんだなって事に気付いたの」

桂の言葉は続く。

「その事に気付いて、ごめんね、やっとそこで、希の大切さが分かった。

本当言うよね、知ったかぶりの年下としか思ってたの。
酷いよね、性格悪いよね。

でも……やっと、気付いた。

どれだけ希に支えられていたか、負担を掛けてきたか……」

「負担じゃないよ」

“支えられていた”と言ってくれた事に、俺は救われて、口を吐いて出たのはそんな言葉。

「負担じゃない。確かに苦しかったけど、それは桂が苦しそうだったから。

ねえ桂。俺、さっきも言ったけど、桂の事が好きなんだ。
だから、負担なんて思ってた事ない」

そう言って笑ったら、桂の目から涙がこぼれた。

きっと、もう10年ぐらい堪えていた涙。

「希……っ」

嗚咽混じりに呼ばれて、どうして俺はこんなにも嬉しいのだろう。

「希……お願い…帰って、きて……」

愛しい君の懇願。

10年前の悲痛な叫びとは違う。

「帰ってきて……お願い……」

君の目が、言葉以上にそれを願ってくれてるのが分かる。

10年経ったのに、俺はまだ、君の瞳で君の心が分かるよ。

なんて、幸せな事だろう。

「桂」

愛しい君の名前を呼ぶ。

君はただただ、潤む瞳で俺を見上げ、そして言った。

「希……私の傍にいて……」

消えそうな声。

「好きだから、一緒にいて……」

小さいけれど、確かな声に、胸がつぶれた。

どうして、こんなにも君の事が愛しいのか。

「うん。俺も、好き。大好き。ずっと、傍にいたい」

愛しい……。。

「桂、好きだよ」

俺は涙を溢れさせる桂の頬を両手で包み、その額にキスをした。

愛しい桂。

まさか君に好きになってもらえるとは。

ねえ、桂。

君自身も、驚いただろうね。

数日後。

俺はバンドメンバーと共に、アメリカに帰ってきた。

さすがに、今すぐどうこうするのは無理なので。

とりあえずは、アメリカと日本で遠距離恋愛。

スタジオでの出来事は、すっかり日本のスクープとして、大々的に発表されてしまい……

今思えば、何であんなこっ恥ずかしい事が、あんな公衆の面前でできたのか不思議だ。

でも幸せだ。

桂。

今俺達は、やっぱり遠い地にいるけれど……

それでも俺は、月のような桂に、恋してる。

第21話：月に恋する（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。評価いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8552b/>

月に恋する

2010年11月24日05時17分発行